

令和6・7年度

家庭科教育とウェルビーイング

全国高等学校長協会家庭部会  
普通教育に関する調査研究委員会

# 目 次

I	研究主題の設定及び調査研究内容	1
1	研究テーマ	
2	研究の趣旨	
3	調査研究内容及び方法	
II	調査研究委員会活動	1
1	調査研究期間	
2	調査研究委員	
3	調査研究委員会活動（令和6年度・令和7年度）	
III	アンケート調査の結果及び分析・考察	2
IV	まとめ	7
	〔資料〕	
1	アンケート依頼文書	
	令和6年度 普通教育に関する家庭科調査研究について（依頼）	8
2	執筆依頼文書	
	令和6年度 普通教育に関する調査研究に係る実践事例の原稿執筆について（依頼）	11
	【実践事例集】（校長・教員）	13
	■テーマ 「家庭科教育とウェルビーイング」	
	「実践事例」一覧	15

## I 研究主題の設定及び調査研究内容

### 1 研究テーマ

家庭科教育とウェルビーイング

### 2 研究の趣旨

平成 18 年に全面改正された教育基本法に基づき、政府は平成 20 年以降、教育振興基本計画を 5 年おきに策定している。令和 6 年 6 月 16 日閣議決定された現在の第 4 期教育振興基本計画では、「社会の現状と変化」として次の 5 つの課題を挙げている。

■将来の予測が困難な、VUCA の時代 ■少子化、人口減少、高齢化

■地球規模課題 ■低い労働生産性、学ばない社会人 ■国や社会に対する意識の低下

こうした課題を踏まえ、当計画では「持続可能な創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイング<sup>\*</sup>の向上」という 2 つのコンセプトが示された。ここで注目されることは、「ウェルビーイング」という概念が強く打ち出されていることである。

家庭科は、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指している。したがって、家庭科は、「日本社会に根差したウェルビーイング」とされる「自己肯定感や自己実現などの獲得的要素」と「人とのつながりや利他性、協働性、社会貢献意識などの協調的な要素」を調和的・一体的に育むことに深く関与することができる教科である。

その一方で、教員の働き方改革は喫緊の課題となっている。前回（令和 4・5 年度）の調査研究においては、家庭科教員の多忙感や負担感が明らかとなり、さらには、令和 4 年度から年次進行で実施している高等学校学習指導要領下において、新しい観点別評価や学習内容に対する不安感が浮き彫りになった。

以上のことを踏まえて、普通科を設置する高等学校を対象に、「ウェルビーイング」をキーワードに校長と家庭科教員の意識と実態についてアンケート調査を実施し、調査結果をもとに分析・考察するとともに、実践事例を収集し、紹介することとした。

これらのことにより、教育振興基本計画の趣旨を踏まえた家庭科教育の更なる充実に資することをねらいとする。

<sup>\*</sup>【教育に関連するウェルビーイングの要素】（第 4 期教育振興基本計画より）

・自己肯定感 ・心身の健康 ・幸福感（現在と将来・自分と周りの他者） ・協働性 ・社会貢献意識 ・学校や地域でのつながり  
・自己実現（達成感・キャリア意識 等） ・安全安心な環境 ・多様性への理解 ・利他性 ・サポートを受けられる環境

### 3 調査研究内容及び方法

#### (1) アンケート調査 <資料 1-1~1-4> p. 8~10

①期間 令和 6 年 11 月 12 日~11 月 26 日

②対象校及び対象者

- ・会員校の普通科単独校及び普通科とその他の学科（職業学科を除く）の併設校 1,149 校
- ・校長及び家庭科教員（各校 1 名）

③主な内容

〔校長〕

- ウェルビーイングの向上のための今後の教育活動
- 家庭科教育に期待するウェルビーイングの要素

〔家庭科教員〕

- 「教育に関連するウェルビーイングの 11 の要素」と共通教科「家庭」の学習内容の関連
- 家庭科教育で重視しているウェルビーイングの要素

#### (2) 実践事例の収集 <資料 2-1~2-2> p. 11~12 テーマ「家庭科教育とウェルビーイング」

## II 調査研究委員会活動

1 調査研究期間 令和 6 年度・7 年度の 2 年間

2 調査研究委員（○委員長）

【令和 6 年度】

- 斉藤 辰彦 茨城県立伊奈高等学校
- 金成 智子 福島県立伊達高等学校
- 萩原 明子 茨城県立結城第二高等学校
- 島崎 一広 千葉県立木更津東高等学校
- 悴田 利行 群馬県立富岡高等学校
- 堀之内 育子 静岡県立清水西高等学校
- （事務局担当）事務局長 名塚 康恵

【令和 7 年度】

- 野中 幹子 神奈川県立綾瀬高等学校
- 金成 智子 福島県立伊達高等学校
- 井上 正治 茨城県立土浦湖北高等学校
- 橋本 明子 栃木県立小南城南高等学校
- 中澤 政幸 群馬県立渋川高等学校
- 堀口 信 千葉県立木更津東高等学校
- （事務局担当）事務局長 加藤 路子

### 3 調査研究委員会活動

【令和 6 年度】	【令和 7 年度】
(1) 第 1 回調査研究委員会 令和 6 年 7 月 8 日（月） ○調査研究の趣旨・テーマ・内容の検討	(1) 第 1 回調査研究委員会 令和 7 年 7 月 7 日（月） ○実践事例原稿確認 ○アンケート調査結果の分析
(2) 第 2 回調査研究委員会 令和 6 年 9 月 9 日（月） ○アンケート調査の対象及び内容の検討	(2) 第 2 回調査研究委員会 令和 7 年 9 月 16 日（火） ○アンケート調査結果の分析・考察
(3) 第 3 回調査研究委員会 令和 6 年 10 月 21 日（月） ○アンケート調査の内容の確定	(3) 第 3 回調査研究委員会 令和 7 年 11 月 25 日（火） ○報告書案の検討
(4) 第 4 回調査研究委員会 令和 7 年 1 月 20 日（月） ○実践事例執筆者の選定	(4) 第 4 回調査研究委員会 令和 8 年 1 月 27 日（火） ○報告書の作成

### Ⅲ アンケート調査の結果及び分析・考察

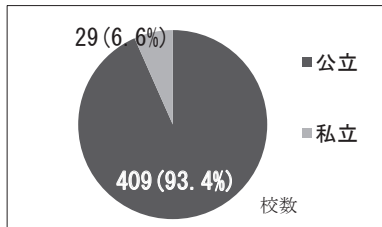
【教育に関連するウェルビーイングの要素】（第4期教育振興基本計画より）

・自己肯定感 ・心身の健康 ・幸福感（現在と将来・自分と周りの他者） ・協働性 ・社会貢献意識 ・学校や地域でのつながり  
 ・自己実現（達成感・キャリア意識 等） ・安全安心な環境 ・多様性への理解 ・利他性 ・サポートを受けられる環境

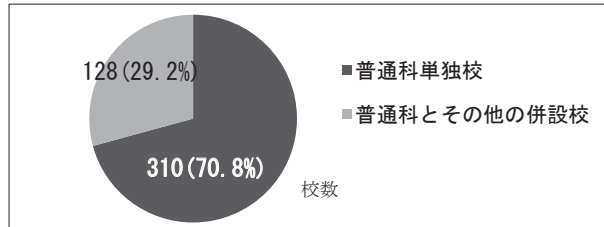
#### 校 長

アンケート依頼校数 1,149校 [普通科単独校及び普通科とその他の学科（職業学科を除く）の併設校]  
 回答校 438校（回答率 38.1%）

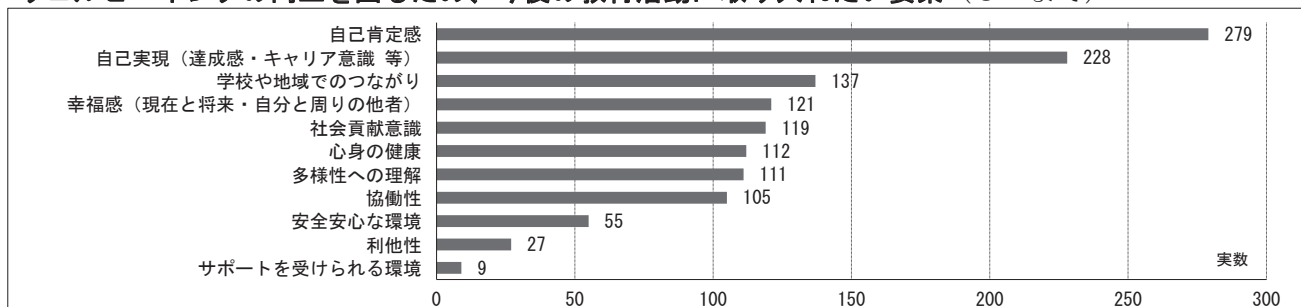
#### 1 設置者



#### 2 設置学科

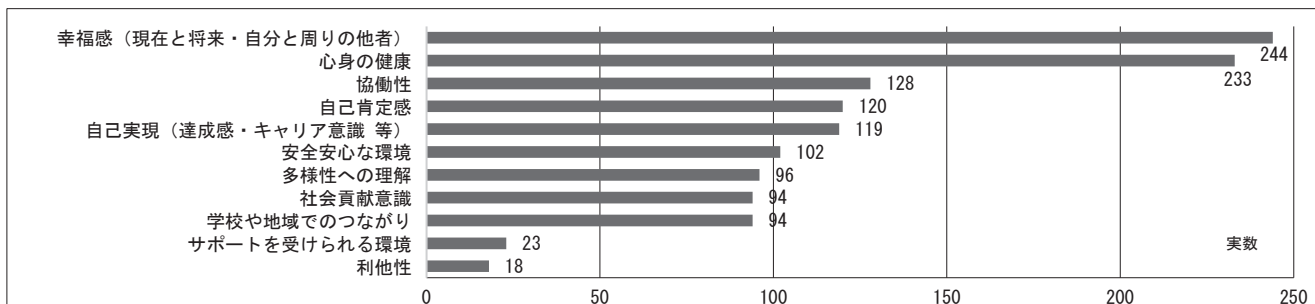


#### 3 ウェルビーイングの向上を図るため、今後の教育活動に取り入れたい要素（3つまで）



「自己肯定感」が279校（63.7%）で最も多い。次いで、「自己実現」が228校（52.1%）であり、半数以上の校長がこの2つの要素を挙げている。

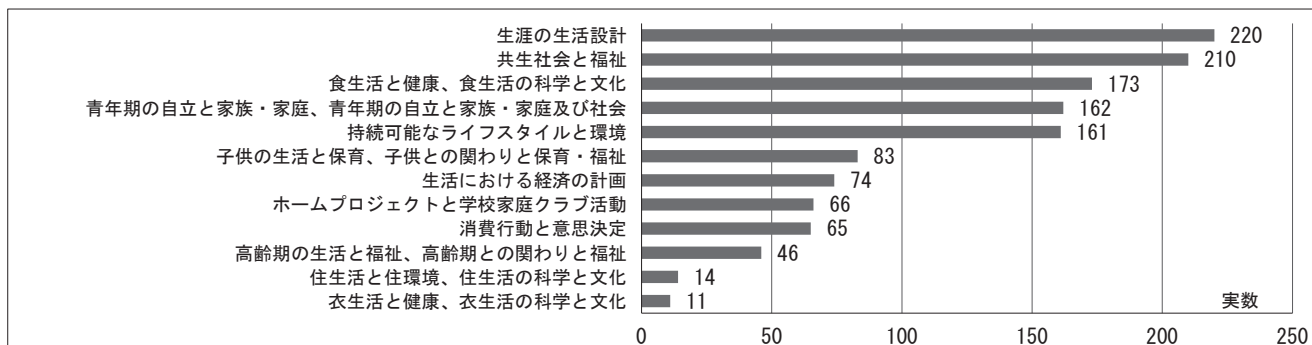
#### 4 家庭科教育に期待する要素（3つまで）



「幸福感」が244校（55.7%）、「心身の健康」が233校（53.2%）で特に多く、半数以上の校長がこの2つの要素を挙げている。続いて、「協働性」が128校（29.2%）、「自己肯定感」が120校（27.4%）、「自己実現」が119校（27.2%）である。

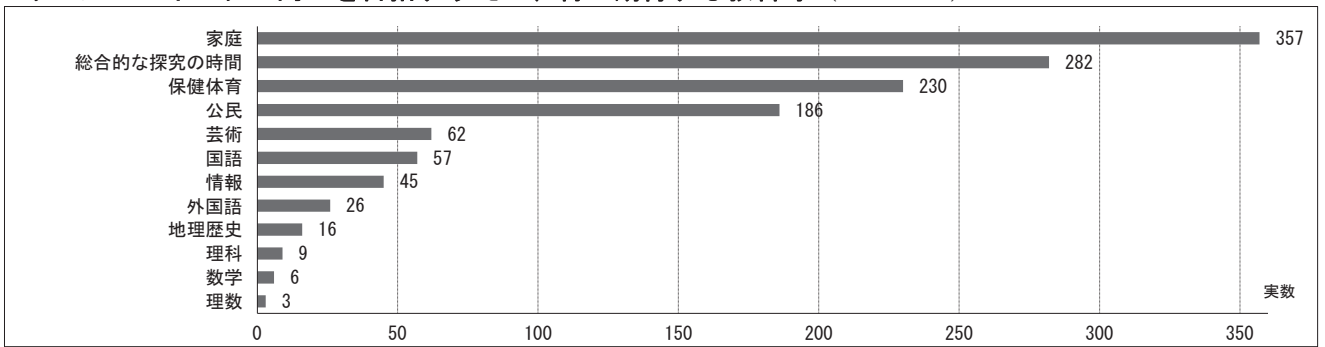
本設問では、「幸福感」、「心身の健康」、「協働性」が、3の設問の上位「自己肯定感」と「自己実現」を上回っており、この要素に家庭科教育への校長の期待がうかがえる。

#### 5 設問4で挙げた要素の向上のために、期待する共通教科「家庭」の学習内容（3つまで）



「生涯の生活設計（家庭基礎・家庭総合）」が220校（50.2%）、「共生社会と福祉（家庭基礎・家庭総合）」が210校（47.9%）で上位を占める。続いて、「食生活と健康（家庭基礎）」「食生活の科学と文化（家庭総合）」が173校（39.5%）、「青年期の自立と家族・家庭（家庭基礎）」「青年期の自立と家族・家庭及び社会（家庭総合）」が162校（37.0%）、「持続可能なライフスタイルと環境（家庭基礎・家庭総合）」が161校（36.8%）であり、他の学習内容と比べて多い。

## 6 ウェルビーイングの向上を目指すうえで、特に期待する教科等（3つまで）

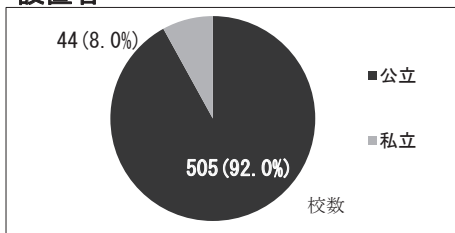


「家庭」が357校（81.5%）で特に多い。続いて、「総合的な探究の時間」が282校（64.4%）、「保健体育」が230校（52.5%）、「公民」が186校（42.5%）である。

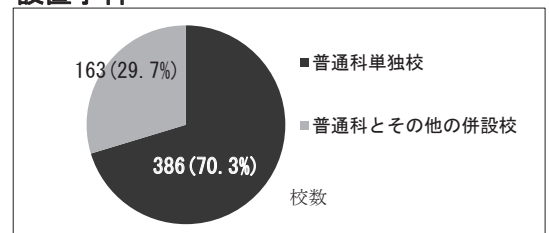
## 教員

アンケート依頼校数 1,149校 [普通科単独校及び普通科とその他の学科（職業学科を除く）の併設校]  
 回答校 549校（回答率 47.8%）

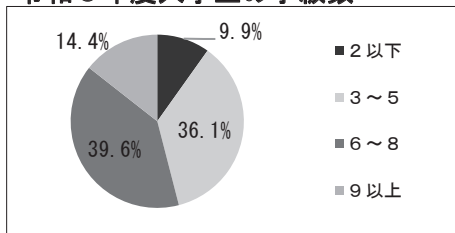
### 1 設置者



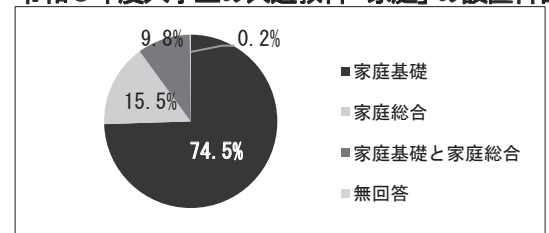
### 2 設置学科



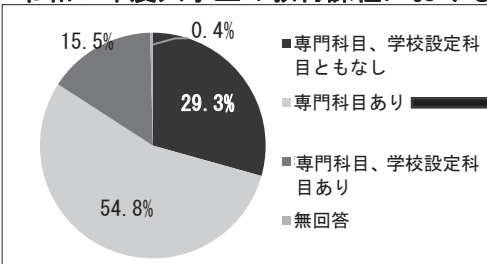
### 3 令和6年度入学生の学級数



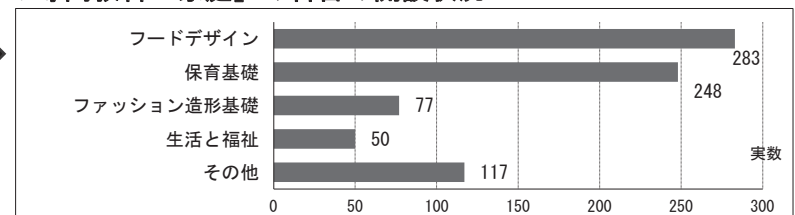
### 4 令和6年度入学生の共通教科「家庭」の設置科目



### 5 令和6年度入学生の教育課程における専門教科「家庭」や家庭に関する学校設定科目について



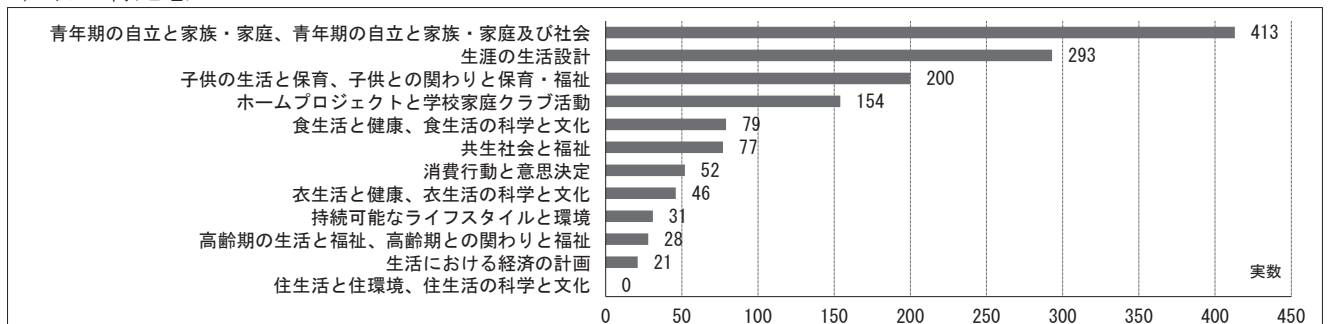
#### ◆専門教科「家庭」の科目の開設状況



「家庭」の専門科目を置いている学校は386校あり、そのうち「フードデザイン」が283校（73.3%）で最も多い。次いで、「保育基礎」が248校（64.2%）であり、2年前（令和4年度）の本調査研究委員会調査結果とほぼ同じ傾向である。

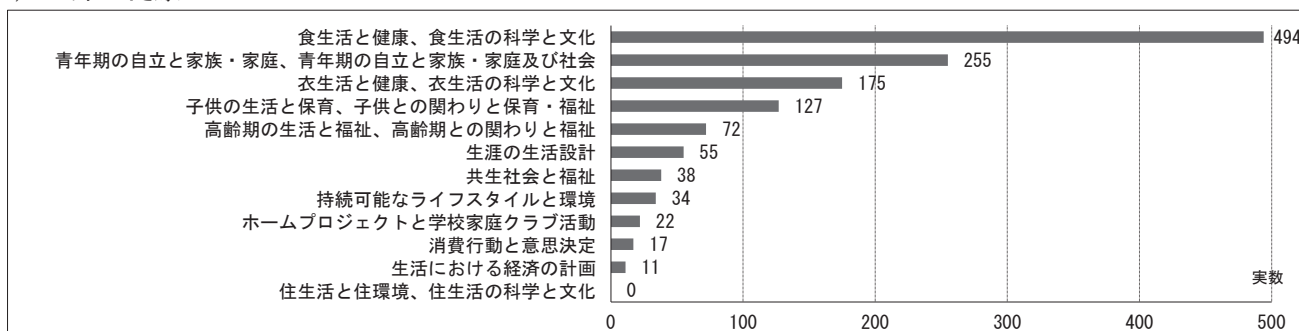
## 6 「教育に関連するウェルビーイングの要素」について、培うことができる共通教科「家庭」の学習内容（3つまで）

### (1) 自己肯定感



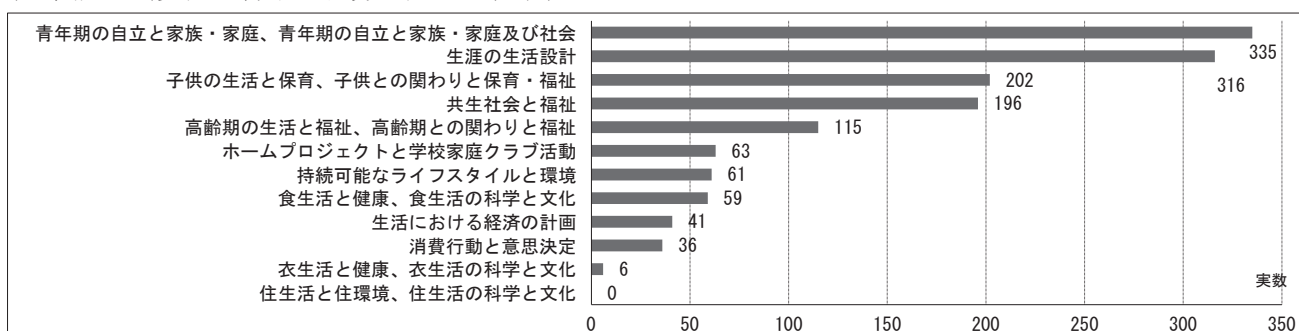
「青年期の自立と家族・家庭（家庭基礎）」「青年期の自立と家族・家庭及び社会（家庭総合）」が413校（75.2%）で最も多い。続いて、「生涯の生活設計（家庭基礎・家庭総合）」が293校（53.4%）、「子供の生活と保育（家庭基礎）」「子供との関わりと保育・福祉（家庭総合）」が200校（36.4%）である。

## (2) 心身の健康



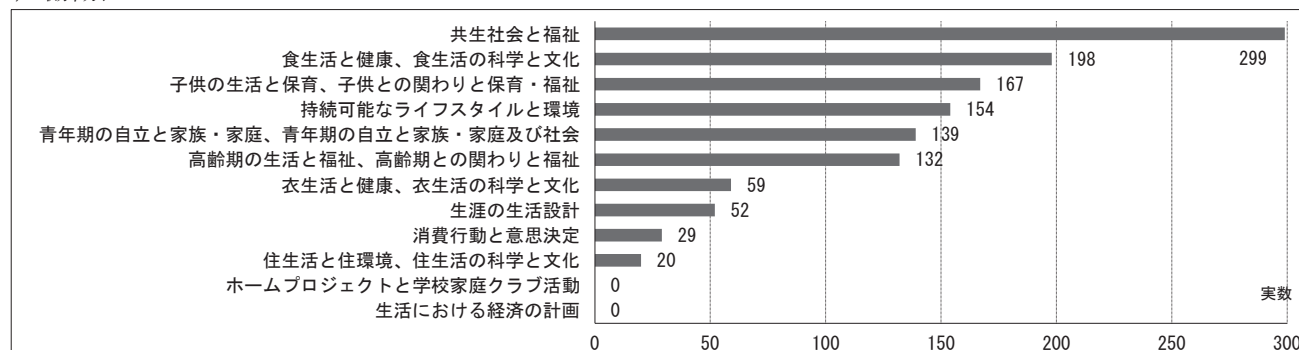
「食生活と健康 (家庭基礎)」「食生活の科学と文化 (家庭総合)」が 494 校 (90.0%) で最も多い。続いて、「青年期の自立と家族・家庭 (家庭基礎)」「青年期の自立と家族・家庭及び社会 (家庭総合)」が 255 校 (46.4%)、「衣生活と健康 (家庭基礎)」「衣生活の科学と文化 (家庭総合)」が 175 校 (31.9%) である。

## (3) 幸福感 (現在と将来・自分と周りの他者)



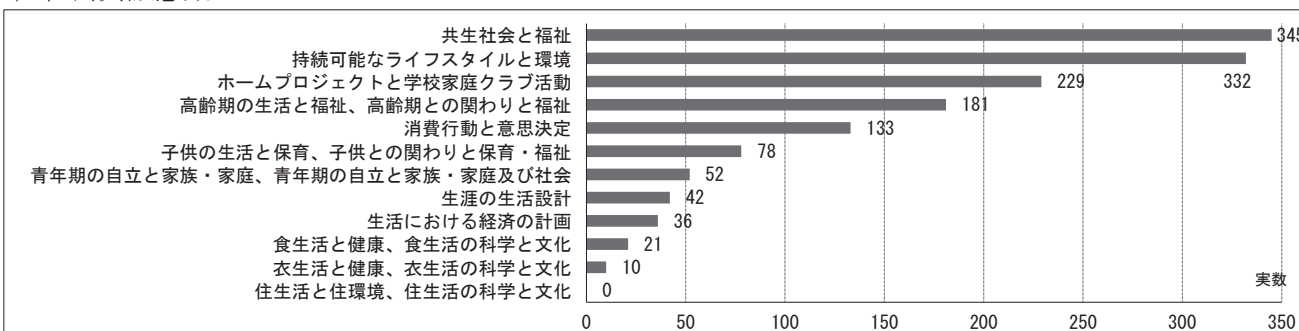
「青年期の自立と家族・家庭 (家庭基礎)」「青年期の自立と家族・家庭及び社会 (家庭総合)」が 335 校 (61.0%)、「生涯の生活設計 (家庭基礎・家庭総合)」が 316 校 (57.6%) で特に多い。続いて、「子供の生活と保育 (家庭基礎)」「子供との関わりと保育・福祉 (家庭総合)」が 202 校 (36.8%)、「共生社会と福祉 (家庭基礎・家庭総合)」が 196 校 (35.7%) である。

## (4) 協働性



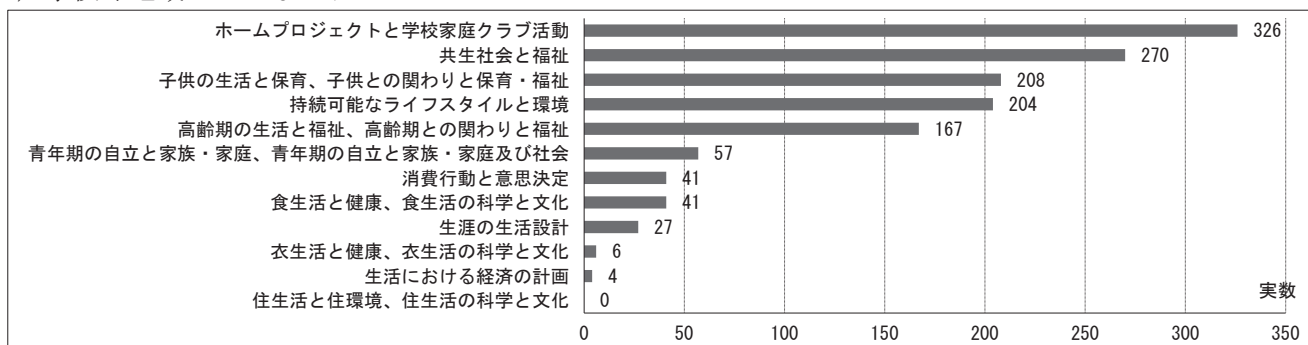
「共生社会と福祉 (家庭基礎・家庭総合)」が 299 校 (54.5%) で最も多い。続いて、「食生活と健康 (家庭基礎)」「食生活の科学と文化 (家庭総合)」が 198 校 (36.1%)、「子供の生活と保育 (家庭基礎)」「子供との関わりと保育・福祉 (家庭総合)」が 167 校 (30.4%)、「持続可能なライフスタイルと環境 (家庭基礎・家庭総合)」が 154 校 (28.1%)、「青年期の自立と家族・家庭 (家庭基礎)」「青年期の自立と家族・家庭及び社会 (家庭総合)」が 139 校 (25.3%)、「高齢期の生活と福祉 (家庭基礎)」「高齢期との関わりと福祉 (家庭総合)」が 132 校 (24.0%) である。

## (5) 社会貢献意識



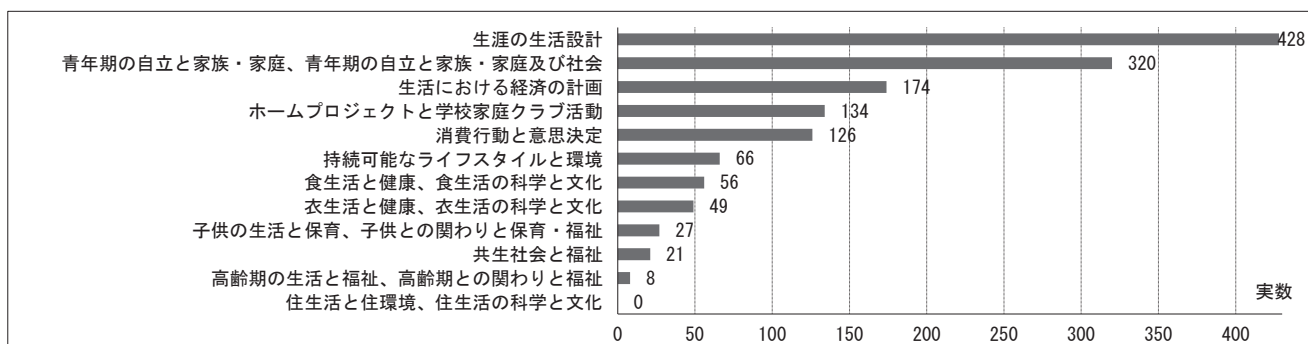
「共生社会と福祉 (家庭基礎・家庭総合)」が 345 校 (62.8%)、「持続可能なライフスタイルと環境 (家庭基礎・家庭総合)」が 332 校 (60.5%) で特に多い。続いて、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動 (家庭基礎・家庭総合)」が 229 校 (41.7%)、「高齢期の生活と福祉 (家庭基礎)」「高齢期との関わりと福祉 (家庭総合)」が 181 校 (33.0%) である。

(6) 学校や地域でのつながり



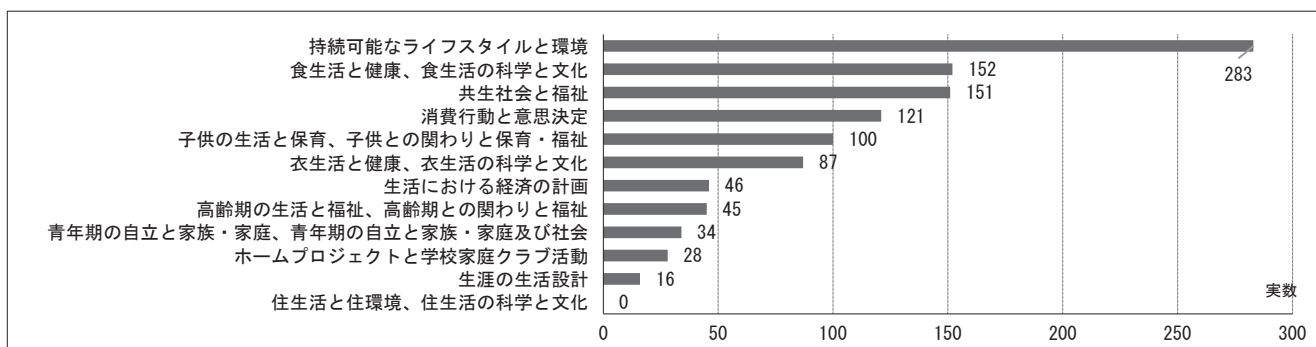
「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動（家庭基礎・家庭総合）」が326校（59.4%）で最も多い。続いて、「共生社会と福祉（家庭基礎・家庭総合）」が270校（49.2%）、「子供の生活と保育（家庭基礎）」「子供との関わりと保育福祉（家庭総合）」が208校（37.9%）、「持続可能なライフスタイルと環境（家庭基礎・家庭総合）」が204校（37.2%）である。

(7) 自己実現（達成感・キャリア意識 等）



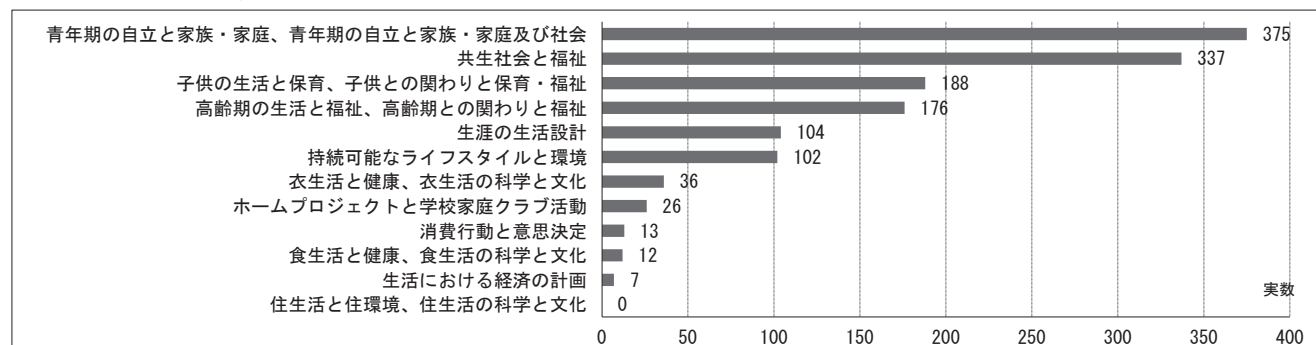
「生涯の生活設計（家庭基礎・家庭総合）」が428校（78.0%）で最も多い。次いで、「青年期の自立と家族・家庭（家庭基礎）」「青年期の自立と家族家庭及び社会（家庭総合）」が320校（58.3%）である。

(8) 安全安心な環境



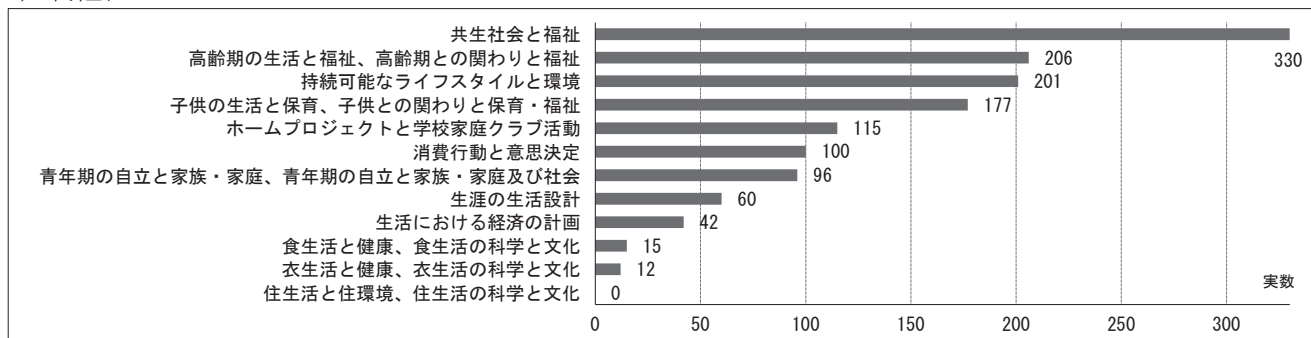
「持続可能なライフスタイルと環境（家庭基礎・家庭総合）」が283校（51.5%）で最も多い。本要素については、他の設問の選択数に比べて少ない。

(9) 多様性への理解



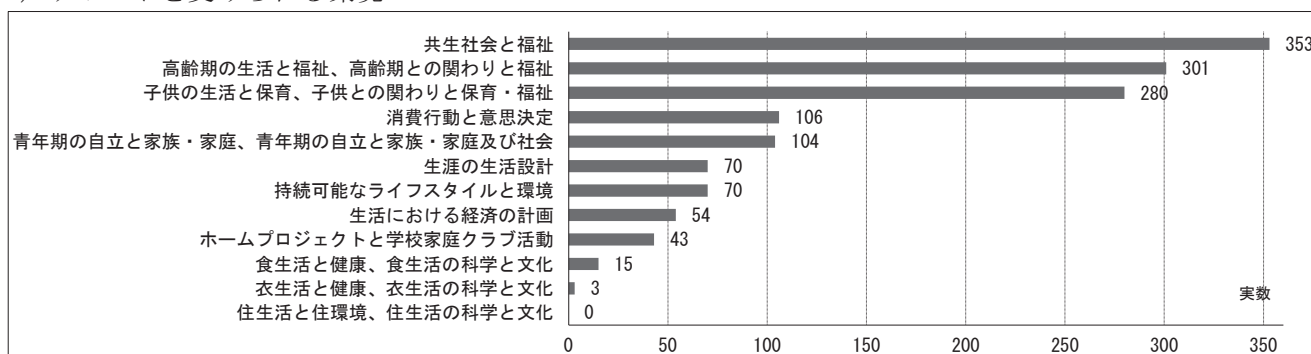
「青年期の自立と家族・家庭（家庭基礎）」「青年期の自立と家族・家庭及び社会（家庭総合）」が375校（68.3%）、「共生社会と福祉（家庭基礎・家庭総合）」が337校（61.4%）で特に多い。

(10) 利他性



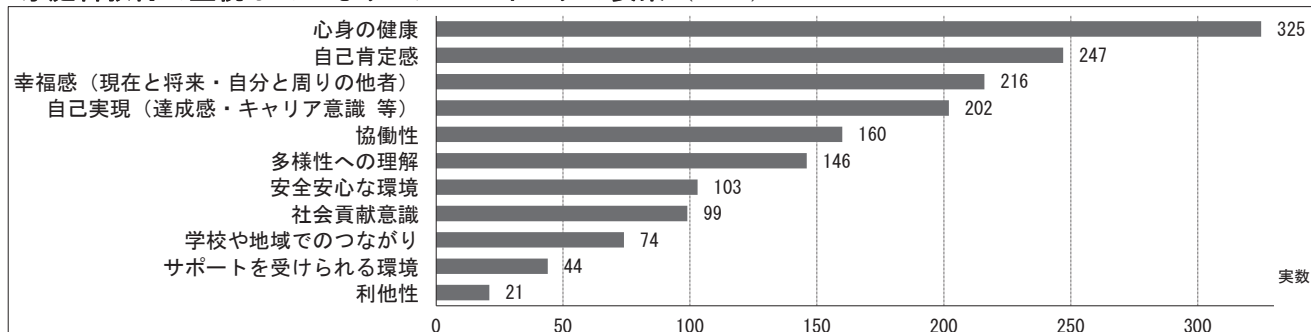
「共生社会と福祉（家庭基礎・家庭総合）」が330校（60.1%）で最も多い。続いて、「高齢期の生活と福祉（家庭基礎）」「高齢期との関わりと福祉（家庭総合）」が206校（37.5%）、「持続可能なライフスタイルと環境（家庭基礎・家庭総合）」が201校（36.6%）である。

(11) サポートを受けられる環境



「共生社会と福祉（家庭基礎・家庭総合）」が353校（64.3%）で最も多い。続いて、「高齢期の生活と福祉（家庭基礎）」「高齢期との関わりと福祉（家庭総合）」が301校（54.8%）、「子供の生活と保育（家庭基礎）」「子供との関わりと保育・福祉（家庭総合）」が280校（51.0%）であり、この3つが特に多い。

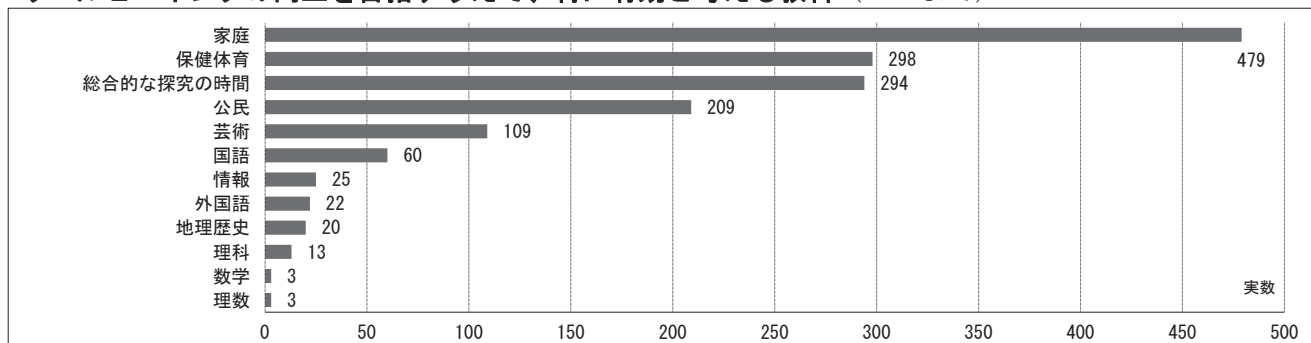
7 家庭科教育で重視しているウェルビーイングの要素（3つ）



「心身の健康」が325校（59.2%）で最も多い。続いて、「自己肯定感」が247校（45.0%）、「幸福感」が216校（39.3%）、「自己実現」が202校（36.8%）、「協働性」が160校（29.1%）である。

この上位5つは校長の「家庭科教育に期待する要素」と同じであるが、校長は、順に「幸福感」（55.7%）、「心身の健康」（53.2%）、「協働性」（29.2%）、「自己肯定感」（27.4%）、「自己実現」（27.2%）であり、順序やその割合は異なる。

8 ウェルビーイングの向上を目指すうえで、特に有効と考える教科（3つまで）



「家庭」が479校（87.2%）で最も多い。続いて、「保健体育」が298校（54.3%）、「総合的な探究の時間」が294校（53.6%）である。

## IV まとめ

本調査研究は、「家庭科教育とウェルビーイング」をテーマに、令和6・7年度の2年間にわたって実施したものである。教育基本法改定後の第4期教育振興基本計画においては、新たに「ウェルビーイング」が掲げられた。「ウェルビーイング」とは、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいう。家庭科は、「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的に捉え、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深め、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする」ことを目標にしている。さらに、実践的・体験的な学習活動を通して、自己肯定感や自己実現といった獲得的要素と、協働性や社会貢献意識といった協調的要素を育んできており、従前から、ウェルビーイングの向上に大きく寄与してきたと考えられる。そこで、「ウェルビーイング」をキーワードに、校長と家庭科教員の意識と実態を把握することとし、その結果は次のとおりである。

### ■ ウェルビーイング向上への家庭科教育に対する高い期待

- ・校長、家庭科教員ともに、教科「家庭」に最も期待し、有効と考えている。
- ・校長は、[自己肯定感]と[自己実現]を教育活動に特に取入れたい要素と考えている。一方、家庭科教育に対しては[幸福感]と[心身の健康]に高い期待を持っている。
- ・校長が共通教科「家庭」に期待する学習内容は、上から順に「生涯の生活設計」「共生社会と福祉」「食生活と健康、食生活の科学と文化」「青年期の自立と家族・家庭、年期の自立と家族・家庭及び社会」「持続可能なライフスタイルと環境」であった。

### ■ 教員が考えるウェルビーイングの要素と学習内容との関連性

#### <獲得的要素と学習内容>

- ・[自己肯定感]には「青年期の自立と家族・家庭、青年期の自立と家族・家庭及び社会」が最も高いと考えている。
- ・[心身の健康]には「食生活と健康、食生活の科学と文化」が最も高いと考えている。
- ・[自己実現]には「生涯の生活設計」が最も高いと考えている。

#### <協調的要素と学習内容>

- ・「協働性」「社会貢献意識」「利他性」「サポートを受けられる環境」といった協調的要素の向上には、共通して「共生社会と福祉」が最も高いと考えている。
- ・「学校や地域でのつながり」には「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」が最も高いと考えている。

### ■ 家庭科教員が家庭科教育で重視しているウェルビーイングの要素

教員は、ウェルビーイングの向上のうえで重視しているのは、上から順に「心身の健康」「自己肯定感」「幸福感」「自己実現」「協働性」であった。

以上のことから、家庭科教育が「自己肯定感」「心身の健康」「幸福感」「自己実現」「協働性」といったウェルビーイングの要素を育むうえで極めて重要な役割を担っていることが、本調査研究を通して改めて確認できた。実践事例においても、「ウェルビーイングの向上」につながっている報告を多数掲載することができたので、参考にさせていただきたい。

課題としては、ウェルビーイングの要素と学習内容との関連性を見たとき、「経済」や「住生活」の評価が少ないことが挙げられる。何に起因するか、本調査では明らかにできなかった。

家庭科教育のさらなる充実・発展は、第4期教育振興基本計画の趣旨に沿った「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」につながると考えられるので、全国高等学校長協会家庭部会としても引き続き家庭科教育の振興に努めていきたい。

おわりに、ご多用中、アンケート調査や実践事例の執筆にご協力くださいました全国の校長先生並びに家庭科の先生方に、心より感謝申し上げます。

## <資料 1-1>

全国高等学校長協会家庭部会  
普通科設置校高等学校長 各位

6 家 第 59 号  
令和6年11月12日

全国高等学校長協会家庭部会  
理事長 小川 剛  
普通教育に関する調査研究委員会  
委員長 斉藤 辰彦  
(公印省略)

令和6年度 普通教育に関する家庭科調査研究について (依頼)

深秋の候、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。  
平素から、当部会の諸事業に御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。  
さて、普通教育に関する調査研究委員会では、今年度と次年度の2年間、下記のテーマ及びねらいに  
基づいて調査研究を進めております。その一環として、アンケート調査を実施することといたしました。  
つきましては御多用のところ誠に恐縮ですが、趣旨を御理解のうえ、下記4により、別紙「普校長用  
アンケート」に御協力をお願いいたします。

また、貴校家庭科教員1名に、依頼文とともに「普教員用」アンケート「質問用紙」をお渡しください  
ますようお願い申し上げます。

### 記

- 1 テーマ  
家庭科教育とウェルビーイング
- 2 調査研究のねらい  
第4期教育振興基本計画（令和5～9年度）では、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本  
社会に根差したウェルビーイングの向上」という2つのコンセプトを掲げている。  
家庭科教育は、教育に関するウェルビーイングの要素である「自己肯定感や自己実現などの獲得  
的要素」と「人とのつながりや利他性、社会貢献意識などの協調的要素」を調和的・一体的に育む  
ことに、深く関わってきている。  
そこで、本調査研究では、「ウェルビーイングの向上」に対する校長及び家庭科教員の意識や取組  
などを把握し、情報を共有することにより、家庭科教育を通して「ウェルビーイングの向上」に  
資することをねらいとする。

- 3 アンケート調査の対象  
・普通科単独校及び普通科とその他の学科（職業学科を含む）1名  
・校長及び家庭科教員（非常勤講師を含む）1名
- 4 回答方法及び期限  
令和6年11月26日(火)までに、「普校長用」アンケート上のQRコードから御回答ください。  
なお、FAXを御利用の場合は、下の問合せ先FAX番号へ送信ください。（鑑不要）  
〔参考〕Windows10又は11でQRコードをカメラアプリで読み取る場合の操作  
(Googleアカウントが必要)

- ① 「スタート」→「すべてのアプリ」→「カメラ」を選択する。
- ② 画面右側のアイコンを操作して「バーコード」モードに変更する。
- ③ カメラにQRコードを向けて映し出す。
- ④ 表示されたURLをクリックするか、【Enter】キーを押す。

<問合せ先>  
全国高等学校長協会家庭部会  
〒102-0071 東京都千代田区富士見1-5-6  
TEL 03-3261-0617  
FAX 03-3288-1670  
E-mail all-kocho@katei-ed.or.jp

## <資料 1-2>

関係高等学校家庭科教員 各位

全国高等学校長協会家庭部会  
理事長 小川 剛  
普通教育に関する調査研究委員会  
委員長 斉藤 辰彦  
(公印省略)

令和6年度 普通教育に関する家庭科調査研究について (依頼)

深秋の候、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。  
平素から、当部会の諸事業に御理解と御協力をいただき、厚く御礼申し上げます。  
さて、普通教育に関する調査研究委員会では、今年度と次年度の2年間、下記のテーマ及びねらいに  
基づいて調査研究を進めております。その一環として、アンケート調査を実施することといたしました。  
つきましては、御多用のところ誠に恐縮ですが、趣旨を御理解のうえ、アンケートに御協力くださ  
いますようお願い申し上げます。

### 記

- 1 テーマ  
家庭科教育とウェルビーイング
- 2 調査研究のねらい  
第4期教育振興基本計画（令和5～9年度）では、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本  
社会に根差したウェルビーイングの向上」という2つのコンセプトを掲げている。  
家庭科教育は、教育に関するウェルビーイングの要素である「自己肯定感や自己実現などの獲得  
的要素」と「人とのつながりや利他性、社会貢献意識などの協調的要素」を調和的・一体的に育む  
ことに、深く関わってきている。  
そこで、本調査研究では、「ウェルビーイングの向上」に対する校長及び家庭科教員の意識や取組  
などを把握し、情報を共有することにより、家庭科教育を通して「ウェルビーイングの向上」に  
資することをねらいとする。

- 3 アンケートの対象  
・普通科単独校及び普通科とその他の学科（職業学科を除く）の併設校  
・家庭科教員（非常勤講師を含む）1名
- 4 回答方法及び期限  
令和6年11月26日(火)までに、「普教員用」アンケート上のQRコードから御回答ください。  
なお、FAXを御利用の場合は、下の問合せ先FAX番号へ送信ください。（鑑不要）  
〔参考〕Windows10又は11でQRコードをカメラアプリで読み取る場合の操作  
(Googleアカウントが必要)

- ① 「スタート」→「すべてのアプリ」→「カメラ」を選択する。
- ④ 画面右側のアイコンを操作して「バーコード」モードに変更する。
- ⑤ カメラにQRコードを向けて映し出す。
- ④ 表示されたURLをクリックするか、【Enter】キーを押す。

<問合せ先>  
全国高等学校長協会家庭部会  
〒102-0071 東京都千代田区富士見1-5-6  
TEL 03-3261-0617  
FAX 03-3288-1670  
E-mail all-kocho@katei-ed.or.jp



普校長用

**全国高等学校長協会家庭部会  
令和6年度普通教育に関するアンケート《質問用紙》**

アンケートの回答はこちらから

◆FAXで回答の場合は、本用紙に回答し、全国高等学校長協会家庭部会宛て送信してください。（鑑不要）  
FAX：03-3288-1670 回答期限 11月26日(火)

1	2	3	4	5
都道府県番号	都道府県名	設置者	学校名	氏名
※不明の時は当部会WEBページ上にあります。		① 国立 ② 公立 ③ 私立		① 普通科単独校 ② 普通科と その他の併設校

※FAXで回答する場合、上の2及び5は該当する番号に○を付けてください。

■以下の設問、6～10にお答えください。

設問上の【教育に関連するウェルビーイングの要素】は、次のとおり。（回答は①～⑪の番号を選択）

- ① 自己肯定感      ② 心身の健康      ③ 幸福感（現在と将来・自分と周りの他者）
- ④ 協働性          ⑤ 社会貢献意識      ⑥ 学校や地域でのつながり
- ⑦ 自己実現（達成感・キャリア意識 等）      ⑧ 安全安心な環境
- ⑨ 多様性への理解      ⑩ 利他性      ⑪ サポートを受けられる環境

6 ウェルビーイングの向上を図るため、【教育に関連するウェルビーイングの要素】のうち、今後の教育活動に特に取り入れたい要素を3つまで選択してください。〔 . . . 〕

7 また、設問6に挙げた要素を育むために、特色ある貴校の取組があればご紹介ください。（自由記述）  
〔 . . . 〕

8 【教育に関連するウェルビーイングの要素】のうち、特に家庭科教育に期待する要素を3つまで選択してください。〔 . . . 〕

9 下表の【学習指導要領における共通教科「家庭」の学習内容（内容項目）】において、設問8で挙げたウェルビーイングの要素の向上のために、貴職が期待する学習内容を3つまで選択してください。

ア～シの記号で回答。〔 . . . 〕

		家庭基礎	家庭総合	
A 人の一生と家族・ 家庭及び福祉	(1)	生涯の生活設計	生涯の生活設計	ア
	(2)	青年期の自立と家族・家庭	青年期の自立と家族・家庭及び社会	イ
	(3)	子供の生活と保育	子供との関わりと保育・福祉	ウ
	(4)	高齢期の生活と福祉	高齢期との関わりと福祉	エ
	(5)	共生社会と福祉	共生社会と福祉	オ
B 衣食住の生活の自 立と設計	(1)	食生活と健康	食生活の科学と文化	カ
	(2)	衣生活と健康	衣生活の科学と文化	キ
	(3)	住生活と住環境	住生活の科学と文化	ク
C 持続可能な消費生 活・環境	(1)	生活における経済の計画	生活における経済の計画	ケ
	(2)	消費行動と意思決定	消費行動と意思決定	コ
	(3)	持続可能なライフスタイルと環境	持続可能なライフスタイルと環境	サ
D		ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		シ

【新学習指導要領における共通教科「家庭」の学習内容（内容項目）】

10 ウェルビーイングの向上を目指すうえで、特に期待する教科等を3つまで選択してください。  
〔 . . . 〕

- ア 国語    イ 地理歴史    ウ 公民    エ 数学    オ 理科    カ 保健体育    キ 芸術  
ク 外国語    ケ 家庭    コ 情報    サ 理数    シ 総合的な探究の時間

以上、ご回答ありがとうございました。



全国高等学校長協会家庭部会  
令和6年度普通教育に関するアンケート 《質問用紙》

アンケートの回答はこちらから

◎家庭科の先生お一人のみお答えください。

◆FAXで回答の場合は、本用紙に回答し、本用紙のみ全国高等学校長協会家庭部会宛て送信してください。

FAX : 03-3288-1670 回答期限 11月26日(火)

1	2	3	4	5
都道府県番号	都道府県名	設置者	学校名	職氏名
※不明の時は当 部会 WEB ページ 上にあります。		① 国立 ② 公立 ③ 私立		① 普通科単独校 ② 普通科と その他の併設校

※FAX で回答する場合、上の2及び5は該当する番号に○を付けてください。

■以下の設問、6～13にお答えください。

- 6 令和6年度入学生の学級数を選んでください。 [            ]  
ア 2以下      イ 3～5      ウ 6～8      エ 9以上
- 7 令和6年度入学生の共通教科「家庭」の設置科目を選んでください。 [            ]  
ア 家庭基礎      イ 家庭総合      ウ 家庭基礎と家庭総合 (学科やコース等により異なる)
- 8・9 令和6年度入学生の教育課程において、専門教科「家庭」や家庭科に関する学校設定科目について、ア～ウの該当するものすべて [    ] に○を記入し、イに該当する場合は、科目の記号を記入してください。  
ア 専門科目・学校設定科目ともなし [            ]  
イ 専門科目あり (複数回答可) [            ] …科目の記号 [            ]  
    a 保育基礎    b ファッション造形基礎    c フードデザイン    d 生活と福祉    e その他  
ウ 専門科目・学校設定科目あり [            ]
- 10 【教育に関連するウェルビーイングの要素】①～⑩について、家庭科で培うことができると思われる内容を、下表の【新学習指導要領における共通教科「家庭」の学習内容 (内容項目)】ア～シからそれぞれ選択し、[    ] に記号で記入してください。(各3項目以内)

【教育に関連するウェルビーイングの要素】

- ① 自己肯定感 [ . . . ]    ② 心身の健康 [ . . . ]  
③ 幸福感 (現在と将来・自分と周りの他者) [ . . . ]    ④ 協働性 [ . . . ]  
⑤ 社会貢献意識 [ . . . ]    ⑥ 学校や地域でのつながり [ . . . ]  
⑦ 自己実現 (達成感・キャリア意識 等) [ . . . ]    ⑧ 安全安心な環境 [ . . . ]  
⑨ 多様性への理解 [ . . . ]    ⑩ 利他性 [ . . . ]  
⑪ サポートを受けられる環境 [ . . . ]

【新学習指導要領における共通教科「家庭」の学習内容 (内容項目)】

		家庭基礎	家庭総合	
A 人の一生と家族・家庭 及び福祉	(1)	生涯の生活設計	生涯の生活設計	ア
	(2)	青年期の自立と家族・家庭	青年期の自立と家族・家庭及び社会	イ
	(3)	子供の生活と保育	子供との関わりと保育・福祉	ウ
	(4)	高齢期の生活と福祉	高齢期との関りと福祉	エ
	(5)	共生社会と福祉	共生社会と福祉	オ
B 衣食住の生活の自立と 設計	(1)	食生活と健康	食生活の科学と文化	カ
	(2)	衣生活と健康	衣生活の科学と文化	キ
	(3)	住生活と住環境	住生活の科学と文化	ク
C 持続可能な消費生活・ 環境	(1)	生活における経済の計画	生活における経済の計画	ケ
	(2)	消費行動と意思決定	消費行動と意思決定	コ
	(3)	持続可能なライフスタイルと環境	持続可能なライフスタイルと環境	サ
D		ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		シ

- 11 家庭科教育で重視しているウェルビーイングの要素を①～⑩から3つ選択してください [ . . . ]
- 12 家庭科教育を通じたウェルビーイングの向上について、特に取り組んでいることがありましたら、該当する要素①～⑩のいずれかを記載し、ご紹介ください。

[要素 \_\_\_\_\_ : \_\_\_\_\_ ]

13 ウェルビーイングの向上を目指すうえで、特に有効と考える教科等を3つまで選択してください。

- ア 国語    イ 地理歴史    ウ 公民    エ 数学    オ 理科    カ 保健体育    キ 芸術  
ク 外国語    ケ 家庭    コ 情報    サ 理数    シ 総合的な探究の時間

以上、ご回答ありがとうございました。

〇〇県立〇〇高等学校  
校長 〇〇 〇〇 様

全国高等学校長協会家庭部会  
理事長 小川 剛  
普通教育に関する調査研究委員会  
委員長 斉藤 辰彦  
(公印省略)

令和6年度 普通教育に関する調査研究に係る実践事例の原稿執筆について(依頼)

梅花の候、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、当調査研究委員会では、「家庭科教育とウェルビーイング」をテーマに、令和6・7年度の2年継続で調査研究を進めております。

本調査研究に際し、過日はアンケートに御協力を賜り、誠にありがとうございました。

この度、当委員会においてアンケート結果をもとに、実践事例を御紹介いただく学校について協議をした結果、貴校の実践について御紹介いただきたく、貴職にお願いすることといたしました。

つきましては、年度末の御多用のところ誠に恐縮に存じますが、下記のとおり原稿執筆に御協力くださいますようお願い申し上げます。

#### 記

- 1 執筆依頼のテーマ  
家庭科教育とウェルビーイング  
(令和8年5月配付予定の報告書に掲載)
- 2 貴職に紹介していただきたい内容  
(別紙1)のとおり
- 3 書式・執筆要領  
(別紙2)のとおり  
執筆要項をデータでお送りするために、**送り先アドレスをお知らせください。**  
件名を「普通事例」として、下記<問合せ先>のアドレスに学校名・氏名を記載し、本書到着後一両日中に送信をお願いします。
- 4 提出期限  
平成7年3月24日(月)  
掲載写真の準備等により遅れる場合は、御連絡ください。
- 5 提出方法及び提出先  
全国高等学校長協会家庭部会事務局宛て、件名を「普通事例原稿(学校名)」として、メールにデータを添付してお送りください。
- 6 掲載方法  
令和8年5月配付予定の当部会報告書、及び当部会ホームページに掲載させていただきます。
- 7 その他  
○原稿は冊子の統一等の都合により微調整をさせていただくこともありますので、ご了承ください。  
報告書入稿前に原稿の確認のため、こちらからご連絡いたします。  
○参考までに前回の報告書の該当頁を同封します。

< 問合せ先 > 全国高等学校長協会家庭部会 事務局長 名塚 康恵 TEL 03-3261-0617 FAX 03-3288-1670 E-mail all-kocho@katei-ed.or.jp
--

## <資料 2 - 2 ①>

〇〇県立〇〇高等学校  
校長 〇〇 〇〇 様

6 家 第 81 号  
令和7年2月21日

全国高等学校長協会家庭部会  
理事長 小川 剛  
普通教育に関する調査研究委員会  
委員長 斉藤 辰彦  
(公印省略)

令和6年度 普通教育に関する調査研究に係る実践事例の原稿執筆について(依頼)

梅花の候、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、当調査研究委員会では、「家庭科教育とウェルビーイング」をテーマに、令和6・7年度の2年間継続で調査研究を進めております。

本調査研究に際し、過日はアンケートに御協力を賜り、ありがとうございます。

この度、当委員会においてアンケート結果をもとに実践事例を御紹介いただく学校について協議した結果、(別紙1)のとおりとなりました。

つきましては、御多用のところ誠に恐縮に存じますが、アンケートに御回答くださいました貴校家庭科教員の原稿執筆について御承知いただき、別添文書をお渡しくださいますようお願いいたします。

なお、原稿は令和8年5月配付予定の当部会報告書、及び当部会ホームページに掲載いたします。

<問合せ先>

全国高等学校長協会家庭部会  
事務局長 名塚 康恵  
TEL 03-3261-0617  
FAX 03-3288-1670  
E-mail all-kocho@katei-ed.or.jp

## <資料 2 - 2 ②>

〇〇県立〇〇高等学校  
教諭 〇〇 〇〇 様

6 家 第 81 号  
令和7年2月21日

全国高等学校長協会家庭部会  
理事長 小川 剛  
普通教育に関する調査研究委員会  
委員長 斉藤 辰彦  
(公印省略)

令和6年度 普通教育に関する調査研究に係る実践事例の原稿執筆について(依頼)

梅花の候、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、当調査研究委員会では、「家庭科教育とウェルビーイング」をテーマに、令和6・7年度の2年間継続で調査研究を進めております。

本調査研究に際し、過日はアンケートに御協力を賜り、誠にありがとうございます。  
この度、当委員会において、アンケート結果をもとに実践事例を御紹介いただく学校について協議をしたところ、(別紙1)のとおりとなりました。

つきましては、年度末の御多用のところたいへん恐縮に存じますが、下記のとおり原稿執筆に御協力くださいますようお願い申し上げます。

### 記

- 執筆依頼テーマ  
家庭科実践事例「家庭科教育とウェルビーイング」
- 貴校に紹介していただきたい内容  
(別紙1)のとおり
- 書式・執筆要領  
(別紙2)のとおり  
執筆要領をデータでお送りするために、**送り先アドレスをお知らせください**。  
件名を「普通事例」として、学校名・お名前を記載し、全国高等学校長協会家庭部会事務局  
**all-kocho@katei-ed.or.jp** へて、**本書到着後一両日中に送信をお願い**します。
- 提出期限  
平成7年3月24日(月)  
掲載写真の準備等により遅れる場合は、御連絡ください。
- 提出方法及び提出先  
当事務局 all-kocho@katei-ed.or.jp へて、件名を「普通事例原稿(学校名・お名前)」として、メールにデータを添付してお送りください。
- 掲載方法  
令和8年5月配付予定の当部会報告書、及び当部会ホームページに掲載させていただきます。
- その他  
○原稿は冊子の統一等の都合により微調整をさせていただくこともありますので、御了承ください。  
報告書入稿前に原稿の確認のため、こちらから御連絡いたします。  
○参考までに前回の報告書の該当頁を同封します。

<問合せ先>

全国高等学校長協会家庭部会  
事務局長 名塚 康恵  
TEL 03-3261-0617  
FAX 03-3288-1670  
E-mail all-kocho@katei-ed.or.jp

《 実践事例 》  
「家庭科教育とウェルビーイング」

◆実践事例の収集について◆

校長及び家庭科教員へのアンケート調査の「教育に関連するウェルビーイングの要素」に関する取組の自由記述をもとに執筆者を選出し、執筆依頼して実践事例を収集した。



## 「実践事例」一覧

### テーマ 「家庭科教育とウェルビーイング」

#### 〈 校長 〉

テーマ	学校名	校長名	頁
地元自治体と連携した学びの創出 — 仮想市役所による地域課題研究—	宮城県富谷高等学校	田淵 龍二	16
地域と共に成長する学校家庭クラブの取組 ～放課後児童クラブボランティア～	茨城県立牛久高等学校	田崎 泰昭	18
CLD生支援の取組	島根県立宍道高等学校	石原 学	20
家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成するために	山口県立周防大島高等学校	安部 豊	22
家庭クラブ活動を通じた地域交流活動	愛媛県立土居高等学校	二宮 敬則	24
高校生が創る未来：やさしい日本語でつなぐ地域と防災	専修大学熊本玉名高等学校	渡辺 正隆	26

#### 〈 教員 〉

テーマ	学校名	教員名	頁
地域と連携した授業実践 ～生徒・教師のウェルビーイングの向上を目指して～	茨城県立結城第二高等学校	大鳥 美香	28
スローフードの勧め ～土曜講座「生きる力を磨く講座」食の世界旅行～	東京都立西高等学校	綿引まゆみ	30
制服の残反で小物をつくろう ～SDGsを意識した小物づくり～	山梨県立甲府南高等学校	津島真奈美	32
高校生の社会参画 Ⅰ 保育と被服実習分野のクロス教材を活用した 地元銀行との官民連携 Ⅱ 乾物を用いた主菜実習、レシピ広告の配布 (地元スーパーとの連携)	静岡県立静岡高等学校	山田 文	34
“考える力”と“情報の掛け算”を意識した 多様性への理解	静岡市立高等学校	寺田 拓也	36
生命の誕生の尊さや感謝の気持ちを育む ～様々な保育体験実習を通じて～	三重県立四日市南高等学校	三徳ゆかり	38
パフォーマンス課題とICTを融合させた 協働的な食事計画作り	岡山県立倉敷南高等学校	小林 雅子	40
農業・商業・家庭がコラボした陵南カフェの実施	倉敷市立真備陵南高等学校	森岡 優衣	42
職業調べによるライフプランの設計 ～大人へのインタビュー～	福岡県立北筑高等学校	柴田由美子	44
多様な社会を生きるために	熊本市立千原台高等学校	片山 七海	46

実践事例は令和6年度執筆のもので、学校名・校長名等はその当時のものです。

## 地元自治体と連携した学びの創出－仮想市役所による地域課題研究－

学校名	宮城県富谷高等学校	所在地	〒 981-3341 宮城県富谷市成田二丁目 1 番地 1
校長名	田淵 龍二		T E L : 022-351-5111 <a href="https://tomiya-h.myswan.ed.jp/">https://tomiya-h.myswan.ed.jp/</a>

〈学校概要〉 平成6年（1994年）に開校した全日制普通科（1学年7学級）の高等学校である。平成26年にユネスコスクールに加盟した。本校では、「ユネスコスクールとして ESD（持続可能な発展のための教育）を推進し、SDGs に基づき、地域社会の課題の発見と解決に寄与し、発展に貢献すること」をスクールミッションの中に掲げている。このミッションを達成するための中心となる取組が、総合的な探究の時間（T-time）である。1年次に世界を探究する SDGs 課題学習を、2年次に地域を探究する課題研究を、3年次に自分自身の生き方（進路）を探究するスーパーTゼミを行っている。特に2年次は2単位で実施しており、本校の教育活動の特色の1つとして挙げられる。これらの取組をとおして、世界的視野（グローバル）を持ちながら、地域（ローカル）に貢献する「グローバル」な人材の育成を目指している。

本校は仙台市に隣接する富谷市南部の新興住宅団地内に立地している。富谷市唯一の高等学校として地域からの期待が大きく、地域と連携した取組は比較的行きやすい環境にある。生徒の居住地は富谷市と仙台市泉区がそれぞれ約40%であり、ほとんどの生徒が学校から10km圏内に居住している。また、ほぼ100%の生徒が進学を希望しており、進学先としては国公立大学から、県内の私立大学、専門学校など多岐にわたる。

### 1 取組の内容

本校ではユネスコスクールとしてSDGsの観点も含め、「持続可能な地域とまちづくり」をテーマに地域課題研究を実施している。

#### （1）研修ツアー

地域課題研究は2年生全員が参加する研修ツアーから始まる。研修ツアーとは、地域課題に対して先進的な取り組みを行っている事業所をクラスごとに訪問する体験型ツアーである。特定非営利活動法人ふうどばんく東北 AGAIN あがいんを訪問した際、フードロス対策について講義を受けた後に体験したフードバンク事業の作業の様子である（写真1）。



写真1

その他、富谷市が市民有志と取り組む養蜂事業の現場など、全9カ所を訪問した。

#### （2）富谷市講演会

地元富谷市の現状や課題を学ぶため、富谷市長を講師として招き講演会を実施している（写真2）。講演テーマは「住みたくなるまち日本一の実現に向けて」であり、富谷市に存在する地域課題に対して、行政がどのような取り組みを行っているかを知る機会となっている。



写真2

#### （3）富谷市総合計画を用いた課題研究テーマの設定

課題研究において最も重要でありながら難しいプロセスがテーマの設定である。特に地域課題を扱う場合、地域課題に対する生徒と社会の認識にズレが生じやすい。そのズレがある状態では、地域との連携はおろか、実践的な研究も実現しない。そこで、本校では富谷市総合計画を研究テーマの設定に活用している。総合計画には富谷市が抱えている地域課題と、それらに対する取組状況が記されている。生徒たちがこの総合計画を読

み込むことで地域の現状を理解し、研究すべき地域課題を見出して研究テーマを設定している。なお、総合計画はSDGsへの貢献と関連付けて策定されており、教材として活用する価値が十分にある。

#### (4) 仮想市役所を組織して行う研究活動

地元自治体と連携した地域課題研究を模索する過程で、まちづくりの中核である富谷市役所の組織に着目した。富谷市役所は7つの部（企画部・総務部・市民生活部・保健福祉部・経済産業部・建設部・教育部）で構成され、それぞれが総合計画に基づき、まちづくりを実践している。そこで、高校内にも市役所を模した7つのチームを組織し研究する体制を構築することで、実際の市役所と連携した地域課題研究が可能になると考えた。これが「仮想市役所」である。これにより、例えば、富谷市役所企画部が仮想市役所企画部（研究チーム）に指導、助言を行うといった、具体的な連携の枠組みを築くことができる。なお、仮想市役所内の研究チームの生徒配属については、(3)で設定した地域課題（研究テーマ）に基づき行っている。富谷市役所の各部職員が来校し、仮想市役所の各部（研究チーム）に指導・助言していただいた時の様子である（写真3）。現場で活動している市職員から直接アドバイスを受けることができ、課題解決策の現実性が高まるなど、研究の深化に寄与している。



写真3

#### (5) 収穫祭（課題研究発表会）

1年間の研究成果を発表する場として、収穫祭を実施している（写真4）。大学の先生方に加えて、富谷市長にも審査員として参加していただいております。富谷市のまちづくりに対する提言の機会にもなっている。また、収穫祭の発表に用いたスライド資料などは、富谷市役所の各部に届けられ、市政運営に活用されている。



写真4

## 2 成果

地元自治体と連携した取組を導入したことにより、地域の課題研究に関心を持った生徒は多くなった。取組1年目となる令和5年度卒業生において、地域課題の研究に関係した学部などを選ぶ卒業生が大きく増えた。国公立大学進学者の半数近くが地域を研究する学部に進学しただけでなく、地元私大の地域総合学部等への合格者数も大幅に増加した。地域課題研究が総合的な探究の時間の取組にとどまらず、生徒自身の生き方を考える契機にもなったと言える。

また、富谷市総合計画を教材として活用するだけでなく、今年度からは富谷高校生が次期富谷市総合計画の策定にも関わっている。つまり、地元自治体との連携により学びが創出されるだけでなく、本校の学びが地元自治体にも貢献するといった互惠関係が構築されつつある。地域課題研究の取組が、「地域とともにある学校づくり」や「学校を核とした地域づくり」の中核となっている。

## 3 今後の課題

総合的な探究の時間で取り組んでいるSDGs課題学習や地域課題研究と、家庭科で取り組んでいるホームプロジェクトについて、それらに関連付けて実施していきたい。世界の課題は地域の課題につながり、そして自己の家庭生活上の課題にもつながっている。この意識を持ち課題解決に向けた探究活動を実践していくことが、持続可能な社会の創り手の育成や日本社会に根差したウェルビーイングの向上につながると考えられる。

**地域と共に成長する学校家庭クラブの取組～放課後児童クラブボランティア～**

学校名	茨城県立牛久高等学校	所在地	〒 300-1204 茨城県牛久市岡見町 2081-1
校長名	田崎 泰昭		TEL : 029-873-6220 http://www.ushiku-h.ibk.ed.jp

〔学校概要〕 本校は、茨城県の県南、牛久市に位置し、創立 45 年を迎える学校である。全日制普通科で 1 学年 6 学級の中規模校である。創立以来文武両道を体現しており、例年、9 割以上が進学し、部活動においては複数の部が全国大会や関東大会等に出場するなど実績を残している。進学においては、大学等への合格者数も近年大きく増加しており、生徒の第 1 希望の進路を実現するために、普段の授業はもとより、各学年に特進クラスを設置するなど、課外活動や探究活動の内容を充実させている。令和 5 年度の進路決定状況は、大学短大進学が 75.3%（うち国公立大学が 18 名）、専門学校進学が 19.2%、就職が 0.9%であった。市内や近隣市町村の企業や官公庁に勤務する卒業生も多くおり、ボランティア活動や探究活動における地域との連携の取り組みも行いやすく、ボランティア活動などを通しての地域貢献への期待も大きい。生徒の気質は、規範意識が高く、伝統的に真面目で誠実である。目指す学校像として、「進路を極める牛久」、「人間性を高める牛久」、「国際社会を生きる牛久」を 3 つの柱としている。またスクールポリシーのグラデュエーションポリシーとして、「国際感覚を身につけ、社会に貢献できる人財」、「自ら課題を発見し、探究していくことができる人財」、「自己の特性を理解するとともに他者を尊重し、多様な人々と協働できる人財」の 3 点を長期目標として掲げている。生徒一人ひとりの進路希望の実現を目指し、国際社会に生きる豊かな人間を育成するなど、知育・徳育・体育の全人的教育を行い、存在感のある学校を目指し地域からの信頼も得ている。国際交流では、毎年、オーストラリア姉妹校と交流派遣を行っており、隔年でオーストラリアへのホームステイを教員引率のもと希望者に実施し、また、オーストラリアからのホームステイ希望者も本校生徒の家庭に受け入れている。今回取り上げた以外のボランティア活動として、文化部である社会福祉部が、地域等の要請に応え、こども食堂や福祉施設における活動、各種募金活動など、積極的な活動を行っている。

**1 取組の内容**

本校家庭クラブでは平成 27 年度から牛久市立下根保育園でボランティア活動を行ってきた。活動に参加した生徒の中から「小学生になったら保護者の仕事が終わるまで何処でどのように過ごしているのだろう」という声があり、それなら実際に行ってみよう活動と発展させ「牛久市内小学校放課後児童クラブボランティア」が平成 31 年 4 月からスタートした。

- 平成 31 年 2 月 牛久市教育委員会放課後対策課に放課後児童クラブにおける高校生ボランティアを打診
- 3 月 牛久市立岡田小学校放課後児童クラブと打ち合わせ
- 4 月 牛久市教育委員会教育長より正式承認
- 4 月 24 日から牛久市立岡田小学校放課後児童クラブにて活動開始  
(内容) 平日 16 時から 17 時まで児童の活動の見守りをする
- 令和 2 年 3 月 新型コロナウイルス感染症流行拡大のため活動休止
- 令和 4 年 5 月 活動再開 (外遊びの見守りのみ)
- 令和 5 年 5 月 児童クラブ支援員リーダー会議訪問 (座談会実施)  
活動中の困りごとを支援員に直接相談し、今後の活動における協働を確認
- 7 月 令和 5 年度第 2 回児童クラブ支援員全体研修会参加 (児童理解のワークショップに参加)
- 7 月 牛久市立中根小学校と牛久市立ひたち野うしく小学校の放課後児童クラブで活動開始  
※ 3 カ所の児童クラブでボランティア活動を同時展開



- 令和6年1月 茨城県高等学校家庭クラブ連盟研究大会において発表  
題目「地域と共に成長する～放課後児童クラブボランティア活動を通して～」  
※茨城県高等学校教育研究会家庭部長賞受賞
- 2月 令和5年度第3回児童クラブ支援員全体研修会で本校家庭クラブの活動を発表
- 7月 令和5年度第2回児童クラブ支援員全体研修会の児童理解に関する講演会に参加
- 令和7年2月 令和6年度第3回児童クラブ支援員全体研修会で3つの児童クラブのボランティア活動報告

## 2 成果



### (1) 社会貢献意識

児童クラブ支援員と児童の保護者から児童の変化を寄せて頂いた。

- ・登校渋りのある児童が放課後児童クラブで高校生と遊びたいから学校に行くようになった。
- ・今まで学校や児童クラブのことは家庭で話題にならなかったが、子どもの方から嬉しそうに高校生と遊んだ話をしてくれた。
- ・児童クラブが楽しいというようになった。児童クラブでの表情が明るくなった。
- ・高校生に甘える姿を見て、支援員や保護者は普段の児童が様々な思いを我慢していることを知った。

児童を相互理解する中に高校生が参加することにより、より多角的に児童理解が進むことがわかった。また児童を迎えに来た保護者から直接「ありがとう」と声をかけられる生徒も多く「自分の活動が人の役に立っていると実感し嬉しくなった」と話す高校生が増えた。

また、参加理由に「母校である小学校に行きたい」という生徒の多くが「かつて自分がお世話になった児童クラブに恩返しをしたいから参加した」としている。

### (2) 生徒の幸福感

母校の児童クラブで活動する生徒は、小学生の時に世話になった支援員との再会を喜び、自身の成長を他者から認められることにより大きな幸福感を感じている。また活動のない日に小学校に面した道路を下校している時に、外遊びをしている小学生から名前を呼ばれる生徒もいる。この経験は自分が小学生にかけがえのない存在として認識されていることを知ると共に幸福感につながっている。

秋以降の活動になると児童から「いつも遊んでくれてありがとう」と手紙をもらったり、お互いに得意なイラストを交換したり、「次も来てね」と約束することが増え、児童に期待されていることを実感する場面が増えてくる。生徒の表情から不安が消え、自信と優しさに満ちてくる姿からは頼もしさを感じる。

### (3) 自己実現

ボランティアに参加する生徒の進路希望は幼児教育や小学校教諭、特別支援学校教諭などの教育関係だけではなく、保育福祉系、看護師や理学療法士などの医療系も多い。共通するのは人とのコミュニケーションが大事であることだ。最初から子どもが好きでコミュニケーションが楽しい生徒ばかりではない。勇気をもって参加したものの、児童の勢いに圧倒されて友達2、3人と固まったまま何もできなかった生徒もいる。そのような生徒も回を重ねるごとに少しずつ児童の中に入りコミュニケーションが取れるようになっていく。それは児童にも色々なタイプがいる事に気が付いたり、遊びの種類によっては自分も関われることに気が付いて自信を付けたり、話を聞いてもらいたい児童と出会うことで傾聴することの大切さに気が付くなどの経験によって培われたものである。生徒自身が自分の夢を追い求める中で気が付く「自分に足りない」ものを補い自信を付けていく姿から、生徒が自己実現に向けて一歩成長していることを感じる。



## 3 今後の課題

3つの児童クラブで活動する「リーダーの育成」が今後の課題である。

## C L D 生 支 援 の 取 組

学校名	島根県立宍道高等学校	所在地	〒 699-0492 島根県松江市宍道町宍道 1586
校長名	石原 学		T E L : 0852-66-7577 <a href="https://www.shinji-h.ed.jp/">https://www.shinji-h.ed.jp/</a>

### 〈学校概要〉

本校は宍道湖の西岸に位置し、平成 22 年 4 月に、県東部に設置されていた定時制課程 3 校（出雲高等学校、松江工業高等学校、松江南高校宍道分校）と、松江北高等学校通信制課程 1 校を統合再編成して、定時制課程（三部制）と通信制課程を併置する県内初の単位制普通高校として開校した。

「発見 敬愛 自律」を校訓とし、「生徒一人ひとりが、色々な人の中で、つながったり、見つけたり、学びあったりしながら『自分らしい生き方をデザイン』していくことを後押しする」をミッションとしている。

本校に進学してくる生徒の多くは、中学校時代に不登校やいじめを経験した生徒、何らかの障がいを抱えている生徒など多様な背景を持つ生徒が多く在籍（令和 6 年度 5 月現在：定時制 324 名、通信制 1,365 名内活動生 651 名）している。また、令和 3 年度より定時制課程において、外国にルーツを持つ生徒（本校では C L D 生と呼ぶ=Culturally Linguistically Diverse/文化的言語的に多様な背景を持つ生徒）の受け入れ校に指定され、現在 19 名（ブラジルルーツ、中国ルーツ、フィリピンルーツ、ネパールルーツ、パキスタンルーツ）が在籍しており、次年度以降も生徒数は増え、出身国もより多岐にわたる。

本校の教職員数は会計年度職員も加えると 100 名を超える。他校にはない職員配置としては教育相談員（退職した教員 5 名が、曜日固定で勤務し生徒への声かけや相談にのる）や、日本語指導員（ポルトガル語・英語・中国語対応）が生徒の支援にあたっている。

### 1 取組の内容

入学してくる C L D 生は、言語的な壁や家庭環境により自己肯定感や自己有用感が低い生徒が多い。入学後、中学校時代は「教室にはいるが、仲間にも入れず透明人間みたいな存在だった」「授業もわからず、いじめを受け学校に行くのがすごく嫌だった」「母国では勉強もでき、自分に自信を持っていたが、言葉がわからないというだけで、自分を否定されたと感じていた」などと語ってくれた生徒もいた。

本校では C L D 生が安心して学校生活を送れるよう学習支援や活動の場を多く提供している。学習面での支援は、学校設定科目として「日本語理解Ⅰ～Ⅲ」「C L D 社会生活基礎」の開講、学習内容に難しい用語が多い「現代の国語」「歴史総合」「化学基礎」「保健」「家庭総合」「情報」の各科目は、C L D 生だけの講座を設定し日本語指導員が授業に入り、分かる喜びを与えている。このような学習支援を進めていくためには、教員の共通理解が必要であり、年 2 回、C L D 生理解のための職員研修を悉皆で行っている。

また、C L D 生が宍道高生として活躍する場は、8 月におこなう外国ルーツ生徒対象の学校説明会がある。C L D 生が説明会資料の作成、説明、校舎案内、通訳などすべて行う。また、学校行事として 11 月に「SHINJI ☆多文化 FESTA」を開催している。前半は C L D 生が企画をし、体育館で自国文化の紹介や、生徒会有志と協力して母国の学校の様子を劇にするなど、毎年工夫を凝らし発表の内容や質も大きく向上している。後半は J I C A に協力をしてもらい、多文化理解のためのワークショップや、やさしい日本語講座などを展開している。昼食時にはブラジル料理、韓国料理、インド料理などのキッチンカーや、フェアトレード製品販売なども行い、食文化や経済についても学ぶ機会となっている。

その他の取組としては、C L D 生だけの企業見学、C L D 生と日本人生徒との交流ツアー「サバゲー」などでの交流を行っている。

## 2 成果

授業での支援を中心に「自分は大切にされている」という思いが芽生えてきて、様々な活動に積極的に関わることができるようになってきた。アルバイトなども行い、社会とのつながりを持ちながら成長の跡がうかがえる。今年度は定時制通信制生活体験発表会島根県大会に宍道高校代表で参加した生徒もおり、見事優勝し全国大会に県代表として出場を果たした。この先輩の活躍をみた下級生が、来年度は自分が全国大会に出場すると、意欲を高めている。CLD生が主体的に活動できる場を提供することで、自分の可能性や良さを再発見する機会となっているとともに、自己を表現する楽しさも得て、自己肯定感の高まりにつながっている。また、1年次はCLD生のみでクラスを編成しているが、2年次以降は日本人生徒と混合のクラスとしている。1年次の活動が他の生徒にも理解され、スムーズに混合クラスに入ることができている。

先述したように本校には多様な背景をもつ生徒が多く在籍している。CLD生と机を並べて学習することが日常であり、部活動や生徒会活動を協力して行うことも当たり前となってきている。CLD生に対する理解だけでなく、ほかの日本人生徒の理解にもつながっている。今年度本校のいじめ認知件数は4件であり、それぞれの個性を尊重しようとする雰囲気が生徒の中で生まれてきていると感じている。

## 3 今後の課題

今後入学してくる生徒はさらに増加し、多言語化・入学時における日本語能力の格差が生じると考えられる。授業の展開においてもより工夫が求められる。たとえば「家庭総合」で食生活について教えるとき、教科書に掲載されているデータの多くは日本の食生活を表しものである。そのためCLD生の生活とミスマッチなところもあり、どのように彼らの実生活のなかに落とし込んだものにするのか、教員の力量を高めていく必要がある。

「CLD生＝サポートが必要な生徒」という捉え方からの脱却も必要である。「属性」ではなく「ニーズ」に対応するための一つの教育（学習）の形態としての共通認識をもたなければ、CLD生の良さを認める機会の減少につながると考える。日本語以外の言語を使用できることや、複言語・複文化を持っている強みに対して学校内だけでなく、社会の認識や評価がまだ追いついていないと考える。単言語・単文化であることも、複言語・複文化であることも等しく価値があるものとして、それぞれに多様な視点によって社会が評価することによって、初めてCLD生が「CLD」であることに自信をもって生きることができると思う。そのような視点・価値を学校としてどのように発信していくかも課題の一つである。

「SHINJI☆多文化 FESTA」への参加は、生徒の他に、県教育委員会、しまね国際センターなど、関係機関に限られている。地域の方、中学校に在籍する外国ルーツ生など、より多くの人を巻き込んだ行事へと高めることで、CLD生のモチベーションの高揚、学校の魅力発信、地域と学校との連携強化にもつながっていくと考える。

令和6年度は、CLD生受け入れ校に指定されてから初めての卒業生（2名）を送り出した。前年度からCLD生の受け入れについて、専門学校や企業を訪問した。しかし、言語能力などを理由に積極的な受け入れについてはあまりよい返事をもらうことができなかった。引き続き進路支援を充実させるとともに、卒業までの4年間で、日本語能力検定1級～2級（N1～N2）の力をつけることを目指していきたい。（N1…幅広い場面で使われる日本語を理解することができる。N2…日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解できる。）

CLD生が言葉によるハンデキャップを克服し、それぞれが持つ良さが発揮できる場をさらに提供することにより、本校のミッションである「自分らしい生き方をデザインしていくこと」をしっかりと後押しできる組織づくりを進めていきたい。

家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成するために

学校名	山口県立周防大島高等学校	所在地 〒 742-2806 山口県大島郡周防大島町西安下庄 489 T E L : 0820-77-1048 https://www.suo-oshima-h.ysn21.jp/
校長名	安部 豊	

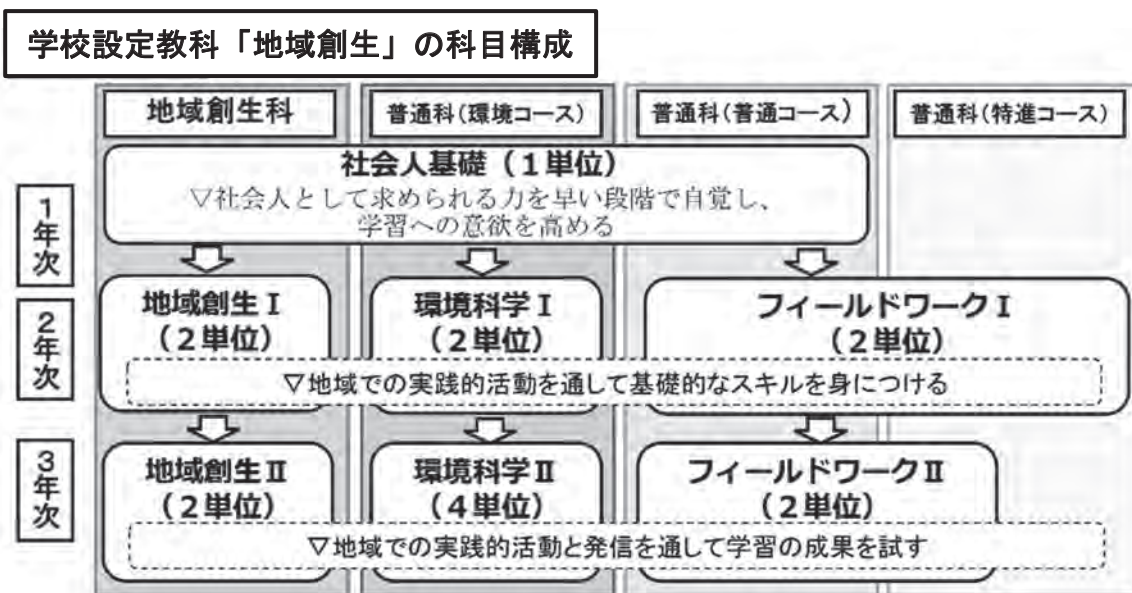
〈学校概要〉 山口県立周防大島高等学校は、山口県の瀬戸内海に浮かぶ周防大島唯一の県立高校である。大正時代に島内で創設された安下庄高等学校と久賀高等学校が統合され、2006（平成18）年に開校した。2校の伝統と教育機能を継承し、現在は普通科と地域創生科の2学科5コースを設置している。島内での連携型中高一貫教育を推進するのみならず、「地域みらい留学」制度などを活用しながら全国募集も行っており、北は北海道から、南は熊本県までの生徒が入学している。

本校には、普通科には「特別進学」「普通」「環境」の3コース、地域創生科には「福祉」「ビジネス」の2コースがあり、生徒は全員、これは「地域の経済・産業・文化、福祉の発展に寄与するとともに、環境と共生する持続可能な社会を築き、誰もが幸せに暮らせる活力ある地域づくりに貢献する社会人として必要な資質と態度を養う」ことを目標とする。学校設定教科「地域創生」を履修する。

2026年度には山口県立大学の附属高校となることが決定したため、現在とは異なる学科やカリキュラムとなる。しかし、今後も地域の方々力を借りながらフィールドワークや探究学習など多様な学びができる学校として、地域と共に未来を切り拓いていく生徒の育成をめざしている。

1 取組の内容

今回紹介するのは、普通科「普通コース」で履修する、学校設定教科「地域創生」の「フィールドワーク」という科目での取組である。この科目では、2年次に地域の課題について考える学習を通して地域の一員としての望ましい心構えや能力・態度を養った後、3年次に小グループに分かれて課題解決をめざした活動を行うことで、知識と技能の深化・統合化を図るとともに、課題解決の能力や自発的、創造的に地域と関わろうとする態度を養う。



ウェルビーイングに関する探究活動を行ったのは、この科目での小グループの1つ「well-being コース」である（本コースは毎年度設置されるわけではない）。本コースでは、生徒が自分の「幸せ」について考えるとともに、周囲の人にも幸せを広げていけるよう意識付けをするため、ウェルビーイングに関する講義を行った。

### (1) 自己理解

「自分にとっての Well-being とは？」を内観・探求できる活動を行った。具体的には、慶應義塾大学大学院の前野教授が提唱する「幸せの4つの因子」の「ありのまま」因子（独立、自分らしさ）に着目し、ワークを通して自分の中の価値あることを単語で書き出し、順位付けを行うことで、自身の大事にしたいことやその理由をグループでシェアした。また、自身の強みや好奇心などに向き合い、自己理解を進めるとともに、多様な価値観への理解を深めた。さらに、「人生で大切にしたい自分の指針」をテーマに、生徒一人ひとりが価値観の基準となる「自分理念」を作成・発表した。

### (2) Well-being×周防大島高校

(1)の自己理解で得た自分の Well-being をベースに、フィールドワークⅡのテーマである「実践的な活動を通して、知識と技能の深化、統合化を図るとともに、課題解決の能力や自発的、創造的に地域と関わろうとする態度を養う」ことや、学ぶフィールドである学校や地域、自分以外の周囲の人にも Well-being を広げていくことに意識を向け、年度ごとに、メンバーの強みを生かし活動を行った。活動の内容については次のとおりである。

- ・ 幸せに関するアンケートの校内での実施
- ・ Well-being に関する動画作成と全校生徒への発信

## 2 成果

これらの取組はいわゆる「家庭科」の授業内でのものではないが、取組を通じて学習指導要領に示されている教科目標の一つである「自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度の育成」の基盤となる「自身の幸せ」や「地域や社会の幸せ」について考える姿勢を身に付けさせることができたと感じている。

#### 〈生徒の感想〉

- ・ 自分の中にしかないような強みや価値観を含めた自分自身の情報、自分はこういう人だといった自分に関することはもちろん得ることができたとともに、コースのみんなと交流していく中でいろいろな考え方や価値観を知ることができた。
- ・ 他人と違うことが当たり前でこの人はこうだけど自分はこうだと意見や意思を持てるようになった。自分の長所がわかり、自分に自信が持てるようになった。
- ・ 今後自分が生きていく中で今回の「well-being コース」を通して学んだことを生かせる部分はたくさんあると感じた。困難に立ち向かっているとき、選択を迫られているときなど色々な場面で価値観や考え方を、しっかりと持って行動することが大切だと思う。
- ・ 人生をどう生きようか考えることができた。
- ・ 幸せになるためには健康であることが大事だと思うようになった。

## 3 今後の課題

学習したことを実際の生活に生かし根付けさせることができるように、衣・食・住のそれぞれの分野について、生徒が Well-being との関連性を考えられるよう、今後の授業の進め方を検討する必要がある。

引き続き、Well-being の考え方に基づいて、生徒が自分や周囲の人の生活・人生をよりよいものにしていくことができるよう、教授法や演習内容を工夫していきたい。

## 家庭クラブ活動を通じた地域交流活動

学校名	愛媛県立土居高等学校	所在地	〒 799-0701 愛媛県四国中央市土居町中村 892
校長名	二宮 敬則		T E L : 0896-74-2017 <a href="https://doi-h.esnet.ed.jp/">https://doi-h.esnet.ed.jp/</a>

〈学校概要〉 本校は、四国中央市の西側に位置し、南に四国山脈赤星山系、北に<sup>ひうちなだ</sup>燧灘を望む風光明媚な田園地帯にあり、旧宇摩郡土居町唯一の高校として地域とともに発展してきた。明治 34 年に宇摩郡立農業学校として創立以来、幾度かの改称や併設されていた農業科や定時制の募集停止が行われ、全日制普通科単独の高等学校となり、昭和 30 年から現在の校名となっている。その間、生徒数は昭和 38 年の全校生徒定員 1,150 名をピークに、昭和 57 年には 1 学年募集定員が 225 名となり、以降は昭和 62 年に 270 名、平成 8 年には 200 名、平成 16 年には 160 名、平成 21 年には 120 名となり現在の規模に至っている。

「自学」「健康」「礼節」を校訓とし、「自分で考え、行動する力」「思いを伝え合い、人と協力する力」の育成を目指し、基礎的・基本的事項の定着を図るための個別指導を重視している。1 年次は全員が共通の教育課程を履修するが、2 年次からは一人一人の進路希望や興味・関心をもとに四つのコースの中から一つのコースを選択し、コースごとの体験活動や実習を重視した活動を通して主体的な学習態度を養うとともに、個性を生かした進路実現へ結び付けている。令和 6 年度末までの本校卒業生総数は 17,028 名であり、国内外の様々な分野で活躍している。近年は、地域経済や産業について学んだ生徒が卒業後地域に多く残り、四国中央市の基幹産業である紙産業を支えている。

本校家庭クラブは全校生徒で組織されている。2・3 年生の役員を中心に、家庭科の授業で学んだことを家庭クラブ活動として発展させ、各種ボランティア活動や校内講習会等を通して学校生活や地域生活の改善に向けて活動している。

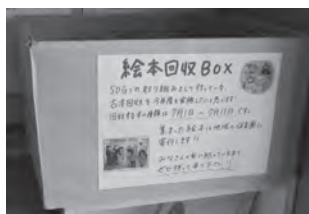
### 1 取組の内容

(1) ストリート・クリーン活動：家庭クラブ役員が呼び掛け、生徒有志で高校周辺の道路の清掃を行った。



(2) 絵本回収

不要になった絵本を回収し、地域の保育園にプレゼントした。



(3) エコキャップ回収

各家庭や校内で出たペットボトルのキャップを回収し、地域のボランティア団体を通して子供向けワクチン代として寄付した。



#### (4) 保育園訪問



「保育基礎」選択生が地域の保育園を訪問し、園児と交流



自作の絵本や手袋シアターを持参し、披露



自作のカルタを使用しての交流

#### (5) 老人保健施設訪問

1年生全員が季節の壁面制作を行い、代表者が地域の老人保健施設を訪問した。



#### (6) 手をつなぐ子らの交流集会



地域の中学校を訪問し、小・中学校の支援学級に通っている児童・生徒と交流した。

地域の小学生、中学生、高校生が一緒になり、ゲーム等をする交流会を、特に小学生が楽しみにしてくれている。

## 2 成果

ストリート・クリーン活動は、呼び掛けると多くの生徒が賛同してくれ、参加者が全校生徒の4分の1を超えることもある。役員による振り返りを行うと、全員、学校周辺がきれいになったと感じており、「環境改善ができた」と答えた。「土居高生の意識が高まったか」という質問に対しては、ごみがきちんとごみ箱に捨てられていることやごみが落ちていたら自分から進んで拾うようになったことから、86%の人は「意識が高まっている」と感じていた。

絵本回収は、先生方からの協力もあり多くの絵本が集まった。家庭クラブ役員が保育園に届け、子供たちに喜んでもらうことができた。エコキャップは7千個近く回収でき、約4人分のワクチン代になるとのことだった。

保育園訪問は、絵本や手袋シアターを製作し、披露している。製作時間が足りず、一緒に外遊びをするだけの時もあるが、高校生の訪問を園児たちはとても楽しみにしてくれている。

老人保健施設訪問は、訪問時期に感染症が流行するなどして大人数の訪問ができないことが続いているが、季節が感じられるよう1年生全員で工夫して壁面を製作し、代表者が施設に届け、喜んでいただいている。

家庭クラブ活動を通じた地域交流活動によって地域理解が進み、地域住民とのつながりが生まれるとともに地域の課題を知り、郷土に対する誇りを持って将来の地域を担うことができる人材の育成につながっている。

## 3 今後の課題

ストリート・クリーン活動は、大人数の参加を得られるものの単発的な活動であることが課題である。エコキャップ回収は、汚れや分別状況から活用できない場合がある。家庭クラブ役員のリーダーシップで、日頃からの地域美化やごみの分別について意識を高め、校内や地域の環境もより良いものにしていきたい。また、絵本回収も、回収の頻度や活用方法について工夫の必要性を感じている。家庭クラブ役員を中心に活動方法をより工夫・改善し、これらの地域交流活動で得た地域住民とのつながりを大切にして活動を発展継続させたい。

## 高校生が創る未来：やさしい日本語でつなぐ地域と防災

学校名	専修大学熊本玉名高等学校	所在地	〒 869-0293 熊本県玉名市岱明町野口 1046 TEL : 0968-72-4151 http : //www.senshu.ac.jp/
校長名	渡辺 正隆		

**〈学校概要〉** 専修大学熊本玉名高等学校は、専修大学の伝統と学風を受け継ぎ、「社会に対する報恩奉仕」を建学の精神としています。この精神を現代的にとらえ直し、「社会知性の開発」を教育の柱とし、地域社会に根ざした学校運営を行っています。本校では、社会に貢献できる有為な人材を育成するために、「知」の輪を広げる活動を推進し、生徒が自ら学び、考え、解決する能力の養成に努めています。生徒の学力向上を図るため、「分かる授業」を徹底し、学習意欲を高める指導を実践しています。進路指導においては、1年次から進路意識を高めるキャリア教育を導入。就職課外、公務員課外、進学課外、資格取得講座、職場体験学習など、多様な支援を行い、生徒一人一人の希望進路の実現を目指しています。また、生徒の個性を尊重し、共感的な指導を行うことで、一人一人が自らの可能性を信じ、挑戦し続ける力を養うことを大切にしています。さらに、玉名市と包括的連携協定を締結し、地域課題の発見とグローバルな視点を持つ人材の育成を目指しています。この協定のもと、教育・文化・スポーツの振興や観光促進、SDGsの推進など、多岐にわたる分野で連携を強化しています。これにより、生徒は地域社会との関わりを深め、社会貢献意識やキャリア意識を高める機会を得ています。こうした取組を通じて、生徒のウェルビーイングを総合的に育む教育環境を提供しています。

また、小さな親切運動加盟校であり、インターアクトクラブ認証校としても活動し、熊本県SDGs登録事業者として、持続可能な社会の実現に向けた教育活動も推進しています。専修大学熊本玉名高等学校は、地域社会と連携しながら、生徒の成長を支え、将来の夢を実現するための環境を提供し続けます。

### 1 取組の内容

本校は、専修大学の21世紀ビジョン「社会知性の開発」を継承し、地域社会への貢献を目的とした「社会知性フォーラム」を開催している。2024年12月7日に、テーマ「やさしい日本語で伝えよう—玉名の観光と防災—」として、玉名市の観光振興と防災について考えるフォーラムを実施した。この活動を通じて、生徒は地域課題の発見と解決に主体的に取り組む力を養い、自己実現や達成感を得る機会とした。

本フォーラムでは、玉名市役所産業経済部観光物産課の高田千織氏が「玉名市におけるインバウンドの現状と課題」について講演し、専修大学国際コミュニケーション学部の阿部貴人准教授が「福祉言語学で切り開く社会—『やさしい日本語』の活用—」をテーマに講演を行った。また、本校生徒による発表では、「やさしい日本語」を活用した観光と防災の具体的な事例を紹介した。生徒たちは4月下旬から11月下旬にわたり「やさしい日本語」について専修大学阿部准教授からリモートによる講義を受け、地域の外国人住民や観光客の視点に立った分かりやすい情報発信の方法を模索。玉名市の防災マニュアルを「やさしい日本語」で作成し、地域住民向けに説明するワークショップを開催するなど、実践的な活動を展開した。このフォーラムを通じて、生徒たちは社会課題を主体的に捉え、解決に向けて取り組む力を育むとともに、地域社会との協力の重要性を学ぶ機会を得た。

### 2 成果

このフォーラムを通じて、生徒たちは地域課題を主体的に捉え、解決に向けて行動する力を養った。特に、「やさしい日本語」を活用した防災情報伝達の取組は、行政や地域住民から高く評価され、実際に玉名市の防災対策の見直しに影響を与えた。生徒たちが作成した「やさしい日本語」を用いた防災マニュアルは、地元の防災訓練でも活用され、多言語対応の重要性が改めて認識された。

また、観光振興の視点からも、外国人観光客がより安心して玉名市を訪れるための環境づくりの必要性を深く理解する機会となった。生徒たちは観光案内所や宿泊施設を訪問し、実際の観光現場での「やさしい日本語」の有用性を調査し、改善点を提案した。その結果、地元観光協会と連携し、外国人向けの温泉パンフレットや案内標識の見直しが検討

されるなど、具体的な変化へとつながった。

さらに、フォーラムを通じて、生徒たちは言語の持つ影響力や情報伝達の重要性を実感し、学習した内容を実社会で応用する意識が高まった。特に、異なる立場の人々と対話しながら意見をまとめ、発表するプロセスを経験したことで、論理的思考力やプレゼンテーション能力が向上した。また、行政機関や大学との連携を通じて、地域社会の一員としての自覚を持ち、協働の大切さを学ぶ貴重な経験となった。このフォーラムをきっかけに、参加した生徒たちは今後も地域課題の解決に向けた活動を続けていく意欲が高まり、新たな地域貢献プロジェクトの企画にも取り組んでいる。

#### 【 高校生による課題報告 】



取組発表



「やさしい日本語」化事例



阿部准教授と生徒たち

### 3 今後の課題

今後の課題は、以下のとおり。

#### (継続的な活動の展開)

本フォーラムの成果を一過性のものとせず、行政や地域社会と連携しながら「やさしい日本語」の活用を広げていく。特に防災情報の発信においては、定期的なワークショップや実地訓練を実施し、地域住民への浸透を図る。

#### (より多くの市民への周知)

フォーラムの内容を広く周知するため、SNS や地域メディアを活用し、情報発信を強化する。幅広い層にリーチできるよう工夫する。

#### (高校生による地方創生の推進)

高校生の力を生かし、地域の活性化に貢献する機会を増やす。高校生の創造力や問題解決能力を発揮し、地域の観光プロジェクトの企画・実施や、地域企業や行政と連携し、地域振興のためのアイデアを提案するなどの活動に取り組むことで、地方創生を牽引する存在となることが期待される。

- ・ 地域の観光プロジェクトの企画・実施
- ・ 地域企業や行政と連携し、地域振興のためのアイデアを提案
- ・ AI やデジタル技術を活用した情報発信 などに取り組むことで、地方創生を牽引する存在となることが期待される。

#### (多文化共生の視点の強化)

「やさしい日本語」の活用を、外国人観光客のみならず在住外国人の生活支援にも広げ、多文化共生の環境づくりを進める。

今回のフォーラムを契機に、生徒たちは地域の担い手としての意識を高め、主体的に社会課題の解決に関わる力を養っていくことが期待される。特に、防災や観光振興における「やさしい日本語」の活用を継続し、地域住民や行政と協力しながら、より実践的な活動へと発展させていく必要がある。また、高校生ならではの発想力や問題解決能力を生かし、地方創生の担い手として地域の活性化にも貢献できるよう、新たなプロジェクトの立案や社会参画の機会を拡充していくことが重要である。本校は今後もこうした取組を推進し、生徒たちの成長と地域社会の発展に寄与していく。

<学校や地域でのつながり>

**地域と連携した授業実践 ～生徒・教師のウェルビーイングの向上を目指して～**

学校名	茨城県立結城第二高等学校	所在地	〒 307-0001 茨城県結城市結城 7355 TEL : 0296-33-21 <a href="https://www.yuki2-h.ibk.ed.jp">https://www.yuki2-h.ibk.ed.jp</a>
校長名	萩原 明子		

〈学校概要〉 本校は、大正2年（1913年）に結城町立女子技芸学校として開校し、令和5年に110周年を迎えた伝統校である。平成20年に現在の三部制・定時制・単位制のフレックス高校となり、自分のライフスタイルに合わせて、学ぶ時間帯を選択し、多様な科目群から学びたい科目を選ぶことができる。長い歴史の中で、家政科が設置されていた時期もあり、その流れを引き継ぎ家庭に関する科目も多く組み込まれている。一人一人の希望や夢の実現に向けて学ぶことができる学校である。

**実 践 の 紹 介**

実施科目又は関連科目名（単位数）	実施学年	担当教員名	大鳥 美香
家庭基礎（3単位） 生活と福祉（2単位）	1・2・3・4年次		

**1 実践のねらい**

- （1）地域との連携を通して地域の理解を深めるため、地域に伝わる伝統菓子を例にとり、伝統文化の理解と継承について理解させる。
- （2）食物や福祉など、その分野の専門家による出前講座等を活用した体験的な学習を多く導入し、生徒の興味・関心を高めるとともに、授業理解への達成感を得られるようにする。
- （3）出前講座等を上手に活用することで、専門的な知識や技術を習得を目指し、あわせて、資格取得につなげ生徒の将来の自己実現を考えるきっかけの一助とする。

**2 実践内容**

（1）ゆでまんじゅう講習会

結城市内にある、手作り和菓子処「真盛堂」と連携し、家庭基礎を履修している2年次生を対象に行った。ゆでまんじゅうは、江戸時代から結城に伝わる伝統菓子である。この講習会は20年近く続いている講習会で、昨年からは希望する保護者にも受講してもらった。講習会では、ゆでまんじゅうの歴史を学び、ゆでまんじゅう作りを体験した。説明を聞き、生地作りから蒸し上げまで、合計約1時間半の講習を受けて、1人3個のゆでまんじゅうを完成させた。



包み方の説明を受ける生徒

【生徒の感想】

- ・今回初めてゆでまんじゅうの歴史を知り、疫病を抑えるために作り神様に祀ったのだとわかった。また、職人さんの手際の良さにびっくりしたのと同時に簡単そうだけどやってみると難しいのが体験してよくわかった。今度ゆでまんじゅうを買う機会があったら、買って食べてみたい。
- ・お菓子作りは難しいものだと思っていたが、実際に作ると楽しい気持ちの方が多く、あっという間に終わってしまった。達成感があり、みんなと協力して作ったお菓子はいつものお菓子よりとても美味しく感じた。

（2）ヘルスサポーター養成講座（食育講座）

結城市食生活改善推進員協議会と連携し、家庭基礎を履修している2年次生を対象に行った。食育講座として専用テキストを使った説明や1日に必要な野菜を実際に手に取る体験を行い、45分の短い講座の中で、朝食

欠食の影響や外食・中食の注意点、食事バランスなど、多くのことを学んだ。また、参加した生徒は、自らの食生活や生活スタイルを見直し、学んだ知識を地域の方々にも広める、健康づくりの実践、支援を行う「ヘルスサポーター」の登録をし、「ヘルスサポーター」の証を受け取った。

#### 【生徒の感想】

- ・今回学んだことを家族にも伝え、自分だけでなく家族全員が健康でいられるようにしたいと思った。
- ・塩分を多く摂取したり、味が濃いものを食べるが多かったので、少しずつ減らしたい。
- ・自分の食事バランスを考えて、注文・購入をして、自分の健康を守り、家族や友人にも今日の授業で学んだことを話したい。

#### (3) 高校生のライフデザインセミナー（赤ちゃんふれあい体験授業）

子育て支援団体 Five for earth と連携し、家庭基礎を履修している1・2年次生徒を対象に行った。現在子育てを行っている方々から話を伺い、新生児の抱き人形を使って抱き方を教わった。乳児幼児と触れ合える時間もあり、子どもとの関わり方についての理解が深まった。

#### 【生徒の感想】

- ・親として子どもを育てることの楽しさだけでなく、辛さなどリアルな面を知れてよかった。子育ては大変そうだけど成長を温かく見守りたいと思った。
- ・赤ちゃんは思ったよりやわらかいし、重いし、よく動く。新しい命って感じがした。

#### (4) 認知症サポーター養成講座

居宅介護支援センターや介護支援専門員と連携し、生活と福祉を履修している生徒を対象に行った。認知症の症状や接し方について、映像を使った説明や実際の体験談なども交えながら説明され、認知症の人やその家族を温かく支援する知識や理解を深めた。また、結城市内で行われている「オレンジカフェ（認知症の方やそのご家族、地域住民、専門職など誰もが参加できる集いの場）」の紹介もあり、興味を示し参加を希望する生徒もいた。合計約1時間半の講座に参加した生徒には全国キャラバン・メイト連絡協議会の「認知症サポーター」の証が発行された。

### 3 成果

専門的な知識をもった方に出前講座を依頼することで、生徒たちもいつも以上に集中して話を聞いている様子が見られ、体験的な学習ができた。また、教師の授業準備の負担軽減にもつながった。各講座終了後のアンケートの感想からは、満足感や達成感の高い授業になったことがわかり、生徒の成長も感じられた。また、受講した証を入手できる講座は、サポーター登録を行うことで、生徒の自己肯定感にもつながり、家族や地域との関わり方や、自身の生活の振り返りと改善、将来を考えるきっかけとなった。結果として、生徒が自分事としてとらえて主体性を高め、地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に一步近づくことができた。以上の点から、生徒、そして教師ともにウェルビーイングの向上につながったと考える。

### 4 今後の課題

限られた時間で効果的な学習成果を得るには、講師の先生方との綿密な打ち合わせが必要である。最初はその打合せに時間がかかるものの、継続的に実施していくことで事前準備にかかる時間を減らすことができた。出前講座を効果的に活用し、地域とつながりを大切にしながら、あわせて生徒の達成感や自己肯定感を高め、生徒と教員のさらなるウェルビーイングの向上に努めたい。



ヘルスサポーターの証



幼児と触れ合う生徒



認知症サポーター養成講座

< 自己実現・煌めく人生を創造する >

**スローフードの勧め ～土曜講座「生きる力を磨く講座」食の世界旅行～**

学校名	東京都立西高等学校	所在地	〒 168-0081 東京都杉並区宮前4丁目21番32号 T E L : 03-3333-7771 https://www.metro.ed.jp/nishi-h/
校長名	土方 賢作		
<p>〈学校概要〉 今年創立87年目を迎え、全日制普通科24クラスを有する都内屈指の進学校である。「文武二道」や「自主自律」を教育理念とし、豊かな知性と教養を醸成する多様な学びを展開している。また、段階的かつ系統的なキャリア教育や国際交流事業など、特色ある教育活動を通じて、心身ともに健全で平和的かつ文化的な社会の発展に貢献できる有為な人材の育成を目指している。</p>			

実践の紹介			
実施科目又は関連科目名（単位数）	実施学年	担当教員名	
家庭基礎（2単位）	2学年（家庭基礎） 全学年（土曜講座）		綿引 まゆみ

**1 実践のねらい**

現代社会では、ファストフード、コンビニ弁当といった短時間・低コストの食事が普及し、家族で食卓を囲む時間や、手間暇かけた料理作りの喜びが失われつつある。また、デジタル化の進展により、ぬくもりのあるコミュニケーションが希薄になりがちな現状では、「居心地の良い空間」や「ゆったりとした楽しい時間」が改めて求められている。

本講座では、自身の2年間の北欧デンマークの在住経験を活かし、北欧の「ヒュッグ」の価値観を取り入れている。「ヒュッグ」とは、居心地の良い空間で心地よく過ごし、のんびりと楽しい時間を共有するという意味で、デンマーク人のライフスタイルに根付いた大切な概念である。この精神を日本の若者に伝えることで、世界各国の食文化や郷土料理を学びながら、温かみのある食体験と人とのつながりを再発見し、豊かな生活感覚とコミュニケーション力の向上を目指す。

**2 実践内容**

- ・毎月1回、【土曜講座「生きる力を磨く講座」食の世界旅行】を本校調理室にて実施。
- ・第1回のアフタヌーンティーと紅茶セミナーは、紅茶スペシャリストの講師を招いて紅茶の基礎知識とアフタヌーンティーの楽しみ方を学ぶ。
- ・夏休み期間の第4回は、2日間連続でフルーツカービング（野菜や果物の彫刻）に特化した集中講座を開催。

第1回	アフタヌーンティーと紅茶セミナー
第2回	フィリピンのソウルフード アドボ・ミヌード
第3回	スペアリブと夏ちらし寿司 フルーツポンチ
第4回	フルーツカービング ①基礎知識と技術 ②応用
第5回	デンマーク料理とヒュッグ フレカデーラ
第6回	スペイン料理 バエリア・アヒージョ・カタラーナ
第7回	フランス料理 若鳥のオージュ谷風・レモンムース
第8回	バレンタインスペシャル ザッハトルテ他
第9回	中国料理 肉饅・餡饅・粟米湯・杏仁豆腐・中国茶



第4回フルーツカービング

※フルーツカービングとは、タイの伝統的な工芸であり、野菜や果物に彫刻を施す技術のこと。

## (1) 事前準備

- ・講座開始約1か月前に、講座内容を効果的に伝える大判カラーポスターを制作し、昇降口、家庭科室、職員室前に掲示。(写真1)
- ・応募者の名簿および名札を準備。
- ・当該国の食文化、郷土料理、マナー等、イラストを交えた板書資料をまとめ、講座当日のテーブルコーディネートのお手本を前方に設置し、生徒が調理室に入室する瞬間から期待感を高める仕掛けをつくる。(写真2)



写真2  
第7回フランス料理(板書)



写真1 募集用ポスター

## (2) 講座実践

- ・講座は13:00~16:00に実施。
- ・前菜からデザートまで、本格的なフルコースの調理を通して、生徒間の交流を促進。
- ・調理過程では、実践的な技術習得とともに、和やかな雰囲気の中で会食を楽しむことで、食に対する理解とコミュニケーション能力の向上を図る。



第6回スペイン料理(パエリア)

## 3 成果

開講してからの5年間、紆余曲折を重ねながら土曜講座「生きる力を磨く講座」を行ってきた。講座開始当初は参加者が10名前後に留まっていたが、魅力的なポスターや講座内容の工夫により、次第に生徒の関心が高まり、現在では抽選で人員を絞るほどの人気講座へと発展した。特に、男子生徒の参加が顕著に増加している点は評価に値する。実際、生徒からは「手間暇かけた料理の美味しさに驚いた」「家庭科が実践的な生きる力を養う授業だと感じた」という声が多数寄せられている。また、多くの家庭科教員が見学を訪れ、意見交換の機会が生まれていることも、本講座の大きな成果の一つである。

## 4 今後の課題

これまでの土曜講座では、多彩な内容を展開してきた。今後も料理のレパートリーを広げ、生徒たちに新鮮な学びを提供し続けるため、世界各国の料理講習会に参加して、最新の知見や技術を習得しながら研鑽を積んでいきたい。

また、講座の普及と発展を促進するため、他教科や地域との連携、さらにはICTの活用など、新たな取り組みも積極的に検討していく方針である。



第3回スペアリブと夏ちらし寿司

<協働性>

制服の残反で小物をつくろう ～SDGsを意識した小物づくり～

学校名	山梨県立甲府南高等学校	所在地	〒 400-0854 山梨県甲府市中小河原町 222 T E L : 055-241-3191 https://www.kofuminami-h.ed.jp/
校長名	篠原 健		

〈学校概要〉 本校は、創立62年を迎え、校訓『開拓者精神』のもと、『真』『善』『美』を追究し、常に新しいものや困難と思われることにチャレンジしようという気風にあふれている。生徒達は、学究的で自主自立の校風を引き継ぎながらも、新しい色をつけ、質を高めようと、日々、学習活動や、部活動、学校行事に取り組んでいる。文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、今年度で21年目となり、多くの実験・実習を行う独自の探究を中心とする学校設定科目を設定し、地域との連携を含め様々な実績を重ねてきた。

実践の紹介

実施科目又は関連科目名（単位数） 家庭基礎（2単位） 2時間連続で設定	実施学年 普通科 1学年 理数科・理数コース 2学年	担当教員名	津島 真奈美
---	----------------------------------	-------	--------

1 実践のねらい

年間を通して SDGs に関連した内容を各分野で取り入れている。「衣生活をつくる」分野での被服実習で、以下の目的を達成できるような小物製作を行うことを目的とした。

- ①SDGs との関連
- ②被服実習での製作
- ③ホームプロジェクトとの連結（See Plan Do See）
- ④班での協働的な活動
- ⑤コミュニケーション・プレゼン能力の育成
- ⑥ICT、BYODの活用

- ・古着や余り布の有効活用について考察し、持続可能な衣生活の充実向上に向けて実践することができる。
- ・一枚の布から作品を仕上げることで、小物製作過程や構造を知る。
- ・4人班で残反を用いて、パソコンなどを使用し、計画・製作・発表し、相互評価、自己評価を行う。
- ・条件として同じ小物を人数分製作するが、手法や役割分担は各班に任せる。

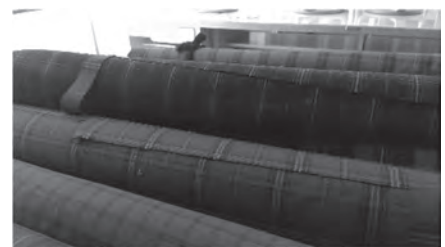
2 実践内容

(1) 事前準備

- 1) 残反の準備：山梨菅公学生服株式会社から制服を製造する際に発生した残反を提供して頂いた。
- 2) Teams で課題と提出物の確認
- 3) 相互評価のために Forms で評価シートを作成

(2) 授業実践

- 1時間目 【計画】 実習のねらい：①②③④⑤⑥
- ・残反の存在を知り、活用する方法を考える
  - ・条件を提示し、作成計画を立てる
  - ・班で同じ小物を人数分作る



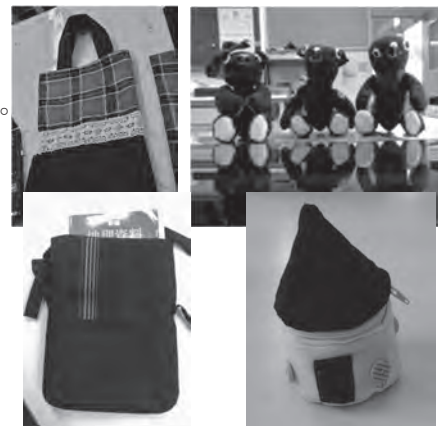
- ・裁縫道具・ミシン、アイロン・糸・接着芯以外は各班でそろえる
- ・作成するものはネット上からダウンロードしてよい。型紙等が必要で印刷が必要な場合は Teams から URL を教員に連絡し印刷する。
- ・代表者は実施計画書を Teams にて提出する

○2～7時間目 【実践】 実習のねらい ②④⑥

- ・2時間（90分）×3回の設定で計画に沿って班で活動をする。

○8時間目 【発表・相互評価・自己評価】 実習のねらい ①④⑤⑥

- ・班ごとに作品とプレゼンシートを提示し、相互評価・自己評価する。



作品

### 3 成果

班のメンバーは指定したため、班員のメンバーと協力しないと製作活動を進めることができない。計画すること、裁断や裁縫、ミシンの扱い方、処理の方法、レポートの作成など題材を決めてから得意な人が得意分野で不得意な分野を補えばよいことを伝えた。おおよそのレベルを表示し、達成目標に近い作品にするように促した。計画書を見てあまりにも簡易なもの、難易度の高いもの、次回までに用意するものを確認しアドバイスした。実践では、計画書やインターネットの動画などを参考にして製作が始まった。残反で見ると一枚布から型紙で裁断したり、竹尺を使用しながらチャコペンでしるしをつけて裁断することは初めての生徒も多く、班で協力しながらそれぞれ裁断していた。ぬいぐるみ、サコッシュやトートバックなどのバック系、ネクタイやシュシュ、ティッシュカバーなど様々な小物にそれぞれの班が挑戦していた。効率よく分業制にする班、裁断までは一緒に行き、個人で進めるがお互いに教えあう班など、時間の使い方は自由である。放課後は被服室を誰が使用してもよいように開放し、時間内に出来ないと判断した班は残って作成していた。評価会ではパワーポイントで発表シートを提示し、各テーブルに作品を置き、班の一人が端末を使用して出来具合や難易度、感想などを Forms を用いてそれぞれの班に入力した。全体が終了後、集計したデータを生徒に表示し共有した。各班に寄せられた評価コメントに耳を傾け、高評価の言葉をもたらした時の笑顔などが印象に残った。自己評価で「この被服実習での学びは何か」聞いたところ、「100均で何でも買ってしまうこの時代に自分で作ることの大切さを知ることができた」、「余ったものから物を作ることができると知った。余ったものに対する目の付け方が変わった」などの感想があり、授業の目標である「古着やあまり布の有効活用について考察し、持続可能な衣生活の充実や向上を目指す」が達成されたのではないだろうか。また、「班員との都合を合わせる難しさとその中で進めるための工夫が考えられた」との回答からも協働的な学習には、知識の獲得にとどまらない深い学びがあったと改めて感じることができた。

### 4 今後の課題

家庭基礎という2単位しかない授業の中で被服実習に8時間を充てることにより被服概論の時間が少なくなってしまう。他の分野でも同様であるが、実習を加味した年間計画を立て、全分野を履修することが困難となっている。SSHでの活動、総合的な探究の時間や他教科との連携を深め、個の意欲や能力を高めつつ協働できる活動が求められる。

<社会貢献意識>

**高校生の社会参画 I 保育と被服実習分野のクロス教材を活用した地元銀行との官民連携  
II 乾物を用いた主菜実習、レシピ広告の配布（地元スーパーとの連携）**

学校名	静岡県立静岡高等学校	所在地	〒 420-8608 静岡県静岡市葵区長谷町 66 番地 T E L : 054-245-0567 <a href="https://www.edu.pref.shizuoka.jp/shizuoka-h1/">https://www.edu.pref.shizuoka.jp/shizuoka-h1/</a>
校長名	織田 敦		

**<学校概要>** 静岡市駿府城跡地の北側に位置し、令和 11 年に創立 150 周年を迎える伝統ある高校である。全日制普通科の生徒は 960 人程度で、定時制が設置されている。本県における高校教育のフロントランナーとして、校訓「印高」の精神の下、主体的に勉学に励み、何事にも探究心をもって課題解決を図る学習を通して、将来、国内外の様々な分野で活躍するグローバルリーダーの育成を目指している。

**実践の紹介**

実施科目又は関連科目名（単位数）	実施学年	担当教員名	山田 文
家庭基礎（2 単位）	2 学年		

**I 保育分野と被服実習のクロス教材を活用した地元銀行との協働連携**

**1 実践のねらい**

(1) 「子どもを社会で育てる視点を持つ」

社会の一員として次世代を育む責任を持つために、高校生から子育てに間接的な関わりを持ち、子どもを社会全体で支えていくことを体験し、理解する。

(2) 「現代の子育て環境の変化や課題を理解する」

仕事と子育ての両立をしている保育者の話を伺い、これからの保育環境について考察する。

(3) 「地元企業(株)静岡銀行からの出張金融教育を受け、協働連携の在り方を理解する」

生徒と地元企業とが Win-Win の関係を築く取組を通じて、協働して社会構築することの喜びと必要性を考察し、生涯にわたりウェルビーイングを追求する資質を育成する。

**2 実践内容**

1 の (1) ～ (3) のねらいに即した授業展開

保育分野	衣生活分野	経済生活分野
1 学期 ①人生設計の授業において、現代の子育て環境と社会環境の整備を考察 ②高校生が実践している間接的な子育て支援の事例を理解	2 学期 ①立体構成を理解 ②幼児の衣服を考察 ③ショートパンツの製作 ④ショートパンツを地元銀行員へ送付 （手紙、アンケート、子育てのご苦労や喜びと本校生徒への質問）	2 学期 ①地元銀行員による「金融リテラシー講座」を受講し、インターネットを利用した詐欺や金融犯罪防止の工夫を考察
	 ショートパンツ製作中	 製作したショートパンツ
	 (株)静岡銀行へ贈呈	 金融リテラシー教育

## II 乾物を用いた主菜実習、レシピ広告の配布（地元スーパーとの協力）

### 1 実践のねらい

（１）「栄養と食品のかかわりを理解し、現代の食生活の課題を見出す」

生徒が自身や家族の食習慣を見直し、生涯にわたる健康維持を考察するだけでなく、社会や環境の変化による食生活の変容から課題を見出す。

（２）「持続可能な食生活を営む工夫を考察する」

食環境の変容に柔軟に対応した献立作成を通じて、人々が健康や安全を保持しつつ自分の生活に応じた食材や調理ができる工夫を考察する。

（３）「乾物を用いた主菜作りの実習を通じて、調理による化学的変化を考察する」



食品ロスを防ぎ、長期保存できる食材づくりを考案する。また、その食材の栄養的価値を生かした主菜レシピを考案し、調理実習をする。

（４）「地域に向けて持続可能な食生活の提案を発信し、食生活コーディネートの実践をする」

乾物を用いた主菜のレシピを地域のスーパーマーケット(株)しずてつストアで配布する。地域の人々の健康や安心を考慮した食環境の提案ができる力を育成するとともに、ウェルビーイングを追求するための思考を深め、社会貢献を意識した取組のサイクルを認知する。

### 2 実践内容

1の（３）（４）を実践する上での生徒への指示

主菜実習計画からレシピレポート作成まで	配布レシピ
<p>①実習班は4人</p> <p>②実習内容は、主菜（たんぱく質を多く含む料理）の自由献立</p> <p>③主菜調理では、乾物（2種類以上以上）を必ず使用（乾物は手作り）</p> <p>④【班員の分担】</p> <p>☆（1名から2名で）料理実習のレシピレポートA4サイズ、Word、PDF、ドキュメントのいずれかでClassroomに提出（班でA4 2枚以内、レシピ作成にCanvaを紹介）</p> <p><a href="https://www.canva.com/ja_jp/free/">https://www.canva.com/ja_jp/free/</a></p> <p>⑤☆（1名から2名で）乾物を作成（調理実習日に間に合うように干す）</p> <p>⑥☆（1名から2名）持参材料の振り分け、購入品の会計、レシピの共有</p> <p>⑦評価方法：ループリック用意</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・班のレシピレポート（班で作成したものを班員の点数とする） 7点（思判表）</li><li>・乾物の用意 5点（思判表）→レシピレポートに写真を載せる。</li><li>・実習事後レポート ドキュメントで（各自で提出） 10点（主体的に学習に取り組む態度）</li></ul>	<p>①提出されたレポートの優秀作品選出 振り返りレポート</p> <p>②優秀作品を広告化し、(株)しずてつストア安東店で配布</p> <div style="text-align: center;"><p>振り返りレポート</p></div> <div style="text-align: center;"><p>優秀レシピ</p></div>

### 3 成果と今後の課題

上記は、生徒が社会貢献の意義を理解し、生涯にわたり、実生活や職業労働の場面でその意識に基づいた取組ができる社会人を育成するための教材である。これらの教材づくりには、家庭基礎学習指導要領の目標にある、よりよい社会の構築に向けて地域社会に参画しようとする人材の育成を指針とした。特に、「参画」というワードに着目し、生徒自らが問題解決のサイクルを理解し、実際にその循環を実践し、経験することが重要だと考えた。

2つの教材の成果としては、本校生徒の多くがそれぞれの課題を社会問題と重ねて考察し、地域社会の生活の充実や人々の健康や安全を願い取り組んだことにある。自分たちの創造物が、世にわたり、誰かの幸せに繋がっている実感を高校時代に得られた経験は、よりよい社会づくりの第一歩になると確証している。今後は、さらに実践数を増やし、他教科との協働授業も展開していきたい。

<多様性への理解>

**“考える力”と“情報の掛け算”を意識した多様性への理解**

学校名	静岡市立高等学校	所在地	〒420-0803 静岡県静岡市葵区千代田3丁目1-1 TEL: 054-245-0417 <a href="https://shizuokacity-h.edumap.jp/">https://shizuokacity-h.edumap.jp/</a>
校長名	飯田 寛志		

〈学校概要〉 全国市町村約 1,700 ある中で、面積は5番目に広い静岡市の市立普通高校である。普通科と科学探究科を併設し、学校全体でSSHに取り組んでいる。4年制大学への進学率が9割を超えながらも「科学的リテラシーをもって解決困難な課題に立ち向かうことができる人材育成」を目標に掲げ、探究活動や研究開発にも力を注いでいる学校である。

**実践の紹介**

実施科目又は関連科目名（単位数）	実施学年	担当教員名	寺田 拓也
家庭基礎（2単位）	2学年		
家庭基礎演習（2単位）学校設定科目	3学年		

**1 実践のねらい**

現代、多様性という言葉が独り歩きをしすぎて「何でも認めよう」「個性を重視しよう」という風潮があるように感じる。私たち人間社会は、先人の歴史や知恵・工夫の積み重ねを経て進化し、現在の社会を築いてきた。しかし、先述したように、近年はこの世の中にあふれた“多様性”を尊重せざる得ない風潮によって、個人の感性を優先した自己本位とも思われるような主張をも社会が認めていってしまうことを危惧している。多様性社会は、自分の思い通りの生活をするとは異なる。自身の多様性を社会に認めさせることよりも、社会に散在する多様性を個々が受け入れていくことが大切ではないかと考えている。そのために、理解や知識、想像力が乏しいままでの自己主張は自己も他者も十分に理解し合う状況には及ばない。私は、家庭科の授業内で「友人や他者の様々な生き方・考え方を認め合う」ことを推進しつつ、そのための根拠や社会における基本的な、原理原則や理屈、情報や体験などを与えることで、思考プロセスに必要な“考える力”と“情報の掛け算”による最適解への結び付けができると考え、1年間の授業に取り組んだ。

**2 実践内容**

「多様性」を主テーマにした授業は実施していない。また、特別かつ高度な内容を扱ったり、単発的な授業になったりしないように留意した。年間の必要な場面に応じて、他者理解をするきっかけや働きかけを行った。その中でも本実践テーマと関連の高いテーマを3つ取り上げる。

(1) 高齢者福祉(写真1・写真2)：高齢者体験(1時間)では、チャイルドビジョンをアレンジして作成したゴーグルで視野狭窄や白内障を疑似体験した。また、同時に軍手も着用して、校舎内を散策、学校敷地内を自転車で走行した。(各1個/人)



写真1 ゴーグル



写真2 高齢者体験

(2) 保育(写真3)：地域の子ども園へ出向き、保育体験(14時間)を実施した。子どもの発達や認知、アタッチメント、欲求などを、保育活動や遊びを通じて学んだ。

(3) 家族と労働・相続：「妻が願った最後の『七日間』」<sup>1)</sup>を題材に、家族とは何か、労働について考えた。(計2時間)

【参考文献】1) サンマーク出版(2018)  
宮本英司：「妻が願った最後の『七日間』」



写真3 保育体験

### 3 成果

#### (1) 高齢者福祉

授業前の生徒は「年を取ると、心身が老化して、自己中心的になり、社会性に乏しくなる。」という声が多かった。体験後は「身体機能の低下はあるけれど、年齢が高齢になってもその人はその人で、僕たちと同じ」という感想が圧倒的に増加した。また、生徒が日常の登下校で出会う、自転車や自動者に乗る高齢者、徒歩高齢者の危険な行動も「悪意や自己中心的に行っているものではない」「私たち若者が気を配って、高齢者の安全を守ってあげる必要がある」等の考えに移行した。

#### (2) 保育

学習前の段階で保育実習に行った生徒は「園児さんに悪口を言われた」「引っ張られて大変だった」など、一方的に「子どもは弱く未熟な存在」の認識が強かった。表層的ダイバーシティはわかっているつもりでも、行動の奥にある幼児の心理や欲求、不安などを汲み取る力がなかった。全実習終了後は、ひとつひとつの言動や行動の意味を発達の観点から考えられるようになった。以下、生徒感想「遊びが何か、具体的に全然分からなかった。実習を通して、ただの『遊び』ではなく色々気づきながら日々『学び』を積み重ねている」「子どもとただ遊ぶことと保育は大きく違う」「夫婦、家族が協力して育児をすることが大切」「子どもたちに気づかされること、僕たちが学ぶべきことがたくさんあった」「一つ一つの行動に意味がある」

#### (3) 家族と労働・相続

様々な家族の在り方を学んだ後、「血縁以外に家族にとって大切なこと」から考えた。参考文献の「最後の七日間」の主人公に対する同情や感情移入を促すのではなく、物語の中の家族のバックグラウンドや支え合いを押しえながら、自分の家族について深く考えさせた。表面には見えてこない「家族間相互への思いが強くなること」や「家族それぞれに状況が存在すること」で、全く同じ問題に対して、複数の家族が直面したとしても、家族ごとに進む方向は異なるということに生徒は気が付いていたようだ。

絶対的な正解がない教科がゆえ、その他の分野や授業内容においても一部生徒は「私はこれが好きだから」や「直感的にこうしたい」という意識の強い生徒が存在した。年度当初、「多様性の時代だから何でもOK」という類の勝手な解釈、あるいは「自分の家では昔からこのやり方だからそれでやる」という慣習概念、「SNSで見たことがある」などの受け身的な情報による持論に終始している生徒もいた。いずれのケースも、知識や根拠は乏しく、既存の判断材料のみで安易な情報に流されやすいということが特徴的であった。1年間「家庭基礎」を学んだことで、多くの生徒が深層的ダイバーシティについての理解に努め、生徒の思考ベクトルが「個人」から「社会」へと変化した場面も多く感じられた。

### 4 今後の課題

すべてを家庭科教育で補うことは不可能だからこそ、教科横断型カリキュラムについても取り組んでいきたい。さらに学校教育全体で、子どもたちが深層的ダイバーシティを判断するための力を強化していく必要も求められると感じた。そのためには、子どもたちが考えるため、掛け合わせるための選択肢となる情報や手法を、教員が様々な角度から提供することが重要だと考える。家庭科教育で担っている「ホームプロジェクト」や、本校で取り組んでいる「SSH」は、そこに大きく関係性が高いと思われる。高校卒業後は家庭科教育が受験等にも存在しないからこそ、生徒自らが各々の努力で情報等を活用しながら、家庭科のノウハウを活かしていくことが重要である。多様性に限らず、そのときにこそ個々のウェルビーイングの真価が問われると考える。

<心身の健康>

**生命の誕生の尊さや感謝の気持ちを育む ～様々な保育体験実習を通じて～**

学校名	三重県立四日市南高等学校	所在地	〒 510-8562 三重県四日市市大字日永字岡山 4917 T E L : 059-345-3177 https://www.mie-c.ed.jp/hsyokk/
校長名	梅原 浩一		

〔学校概要〕 昭和 34 年に創立し、全日制普通科、全 24 クラスからなる学校である。学校は四日市市の南部丘陵地帯にあり、市街地と化学コンビナートを眺める学校からの夜景は絶景である。生徒のほぼ全員が 4 年生大学へ進学を希望しており、学習と部活動を両立できるよう努力している。また、生徒が主体的に考え、行動する学級活動や生徒会活動を大切にしており、豊かな感性や人権意識、他者と協働する力を育むとともに、社会に貢献する意思を持つ生徒の育成を目指している。

**実践の紹介**

実施科目又は関連科目名（単位数）	実施学年	担当教員名	三徳 ゆかり
家庭基礎（2 単位）	1 学年		

**1 実践のねらい**

乳幼児の心身の発達での「愛着（アタッチメント）」の形成は、生涯にわたる人間関係の基礎となる、コミュニケーションの形成に重要である。妊婦体験・新生児赤ちゃん抱っこ体験・幼児視野体験・絵本読み聞かせ・手遊び歌とスポンジパズルの製作（オリジナルデザインも含）を通じ、「生命の誕生の尊さや感謝の気持ち」を育み、この体験を通じて、将来新しく家庭を築いた時に、子が安全で心理的なつながりを育むことができることがねらいである。

**2 実践内容**

指導計画（16 時間） 単元 保育&被服製作

- ①DVD 視聴、妊婦&赤ちゃん抱っこ体験、幼児視野体験・絵本の読み聞かせ（3 時間）
- ②心の発達と遊び、親の役割、子どもの生活と健康、日本の子育て事情（2 時間）
- ③スポンジパズル製作&手遊び手袋の被服実習、手遊び手袋で歌遊び（11 時間）

（1）DVD 視聴後に妊婦&赤ちゃん抱っこ体験、幼児視野体験・絵本の読み聞かせ（3 時間）

「生命の誕生 2～命を育む」DVD 視聴後に、以下の体験を班ごとに（4 人×10 班）行った。

①妊婦体験（妊娠 8 か月）

胎児の模型（4D エコー映像・エコー写真も含）を展示した。体験の前に、妊婦の体重の変化（胎児・羊水・胎盤など）や悪阻の時期、性別が分かる時期、妊娠 8 か月の妊婦の状態なども説明した。



①妊婦体験（妊娠 8 か月）

## ②新生児赤ちゃん抱っこ体験

新生児の大きさ・抱き方や新生児の過ごし方等を説明し、1か月後の赤ちゃんの写真も展示した。

## ③幼児視野体験

幼児視野体験メガネ（チャイルドビジョン）を作成し、大人とこどもの水平と垂直方向の視野の違いを説明し、幼児がキョロキョロしている理由や幼児に起きやすい事故についても説明した。

## ④絵本の読み聞かせ体験

資料集に紹介されている0～5歳児向けの絵本を20冊以上用意し、保育者役と幼児役に分かれて自由に絵本を選んだ。特に1歳半の幼児は、まだ言語が15語程度で喃語も多いことから、「だるまさんがころんだ」の本を見本で読み、絵本の細かいところ（顔の表情など）を見ていることも説明した。



②新生児赤ちゃん抱っこ体験



③幼児視野体験



④絵本の読み聞かせ体験

これら①～④の体験（DVD視聴も含）の感想や分かったことなどをレポートとして提出させた。

## (2) 心の発達と遊び、親の役割、子どもの生活と健康、日本の子育て事情（2時間）

Google Classroomにて、上記の内容の授業をスライドや動画を使用して座学の授業を行った。

## (3) スポンジパズル製作&手遊び手袋の被服実習、手遊び手袋で歌遊び（11時間）

0歳児からでも遊べる「スポンジパズルと手遊び手袋」の製作を行った。パズルの1面だけはオリジナルデザインとし、他の5面は型紙を基本とするが、フェルトの色や図面は自由に変更可能とし、生徒の意欲・関心を育てた。手遊び手袋にボタンやおおむしの目玉を付け、手袋シアター用にフェルトで自由に素材を考え、皆で手遊び歌（おおむしの歌他2曲）を歌って遊ぶ授業を試みた。歌のアンコールをしたクラスもあった。



スポンジパズル製作&手遊び手袋の被服実習、手遊び手袋で歌遊び

## 3 成果

体験レポートに「今まで育ててくれた親に感謝」「生命の誕生に感動」などがあり、改めて命の尊さに気づく機会となった。また、小さい子どもが喜ぶ姿を想像しながらの玩具製作は、創意工夫のある作品も多く、愛情たっぷりであり、主体的に取り組み、ウェルビーイングの向上につながる実践となったと思われる。

## 4 今後の課題

この授業は前任の学校から取り組んでいる。1年前に卒業生から「おおむしの歌を3年生を送る会で歌いたいで、先生のビデオレターが欲しい」と依頼があった。私がキーボードで伴奏をしながら、手遊び歌とメッセージを送った。今回の授業が将来に役立っているかどうかは課題であるが、「キャベツの中からおおむしでたよ！ピッピッピッピッピッー蝶々になりました～♪」と、10年後・20年後に教え子の子ども達が、少しでも私の授業を思い出して、楽しく子育てをしていていたらと願っている。今後は外部機関（保育園）などの連携も視野に入れて、さらに発展した授業展開ができたらと思っている。

<協働性>

パフォーマンス課題と ICT を融合させた協働的な食事計画作り

学校名	岡山県立倉敷南高等学校	所在地	〒 710-0842 岡山県倉敷市吉岡 330 T E L : 086-423-0600 https://www.kuramina.okayama-c.ed.jp
校長名	平野 わかば		

〈学校概要〉 創立 51 年目、全日制普通科 1 年次 8 クラスの学校である。ほとんどの生徒が大学進学を目標に入学し、大半が国公立大学に合格する進学校である。かつて天領地であり多くの蔵が立ち並ぶ歴史的な景観を持つ倉敷の街に位置し、社会に開かれた進学重視型単位制カリキュラムを取り入れている。それぞれの学びを「探究」でつなげ、知り、深く考え、未来を創るために行動する志と力で、「未来創造力」を育てている。

実践の紹介

実施科目又は関連科目名 (単位数)	実施学年	担当教員名	
家庭基礎 (2 単位)	1 学年	小林 雅子	

1 実践のねらい

「食生活と健康」という単元の中で、パフォーマンス課題を設定し、ICT の活用によって、より協働的な学びにつながるように構想した。小中高の学びの系統性を意識し、中学校までの食生活の学びを更に発展させ、単なる食事計画の立案ではなく生涯の健康を見通した食事計画になるように意識した。

2 実践内容

パフォーマンス課題：栄養バランスの取れた昼食献立（お弁当）の作成

高校生になったあなたは、人生 100 年時代を見据えて、健康管理の一貫として栄養バランスの取れた食事を計画する能力が必要となります。グループを組み、教科書 p 106～111 を参考にしながら昼食献立（お弁当）を Google ドキュメントの共同編集機能を使って協力して作成しなさい。さらには、作成した献立を実際に調理してその記録をとり、「実習のねらい」「栄養価計算」「実習費の計算」「考察」まで含めた内容をスライド 5 枚にまとめて、クラスでプレゼンテーションしなさい。Google フォームで各班の評価もします。



共同編集による献立作り



実習風景



生徒作成スライド

## 【 ICT 活用場面 】

- Classroom でパフォーマンス課題とその評価基準を提示（ルーブリック）

ルーブリック	A	B	C
献立の栄養バランスを考えることができ、1群～4群までのすべての食品群が使われている。	食品群別摂取量の4つがすべてが使われている	食品群別摂取量が3つまでしか使われていない	食品群別摂取量が2つ以下である。
バランスよくいろいろな調理法を用いたり、味付けを塩味やしょうゆ味だけではなく、酸味や甘味も加えて構成できているか？彩りは良いか？主菜のインパクトはあるか？	調理法、味、彩り、インパクトすべてにおいて基準を満たしている	調理法、味、彩り、インパクトいずれかが基準を満たしていない。	調理法、味、彩り、インパクトのすべてが基準を満たしていない。
グループで合意形成を図りながら、献立作成に向けて主体的に話し合いに参加できている。	グループで合意形成を図りながら、献立作成に向けて意欲的に自分の意見を発言して話し合いに参加している。	意欲的に話し合いに参加しているが、献立作成に向けての自分の発言が十分でない。	意欲的に話し合いに参加できていない。

- Google ドキュメントで共同編集による献立作成
- Google スライドでプレゼン資料作成、それを使ってのプレゼンテーション
- Google フォームを使っての班単位での相互評価、相互評価の結果の開示

### 3 成果

生徒たちは共同編集で献立を作成する過程で、グループの相互作用によって思考を広げ、深めることができた。自ら材料を用意し調理実習に取り組むことで、興味を持って熱心に学んだ。調理実習は「楽しい」授業であるが、「楽しさ」の中に「学び」を成立させるため、ルーブリックやプレゼン評価基準を提示したことにより、栄養バランスや調理技術の重要性を理解し、表現力も養うことができた。さらに、SDGsの「作る責任」を意識し、食品ロス削減の工夫も見られた。

また、調理実習を通じて得られた学びは、単なる机上の知識ではなく、実生活に役立ち人生を豊かにする知恵へとつながる「実践的な学び」として機能した。特に、Google ドキュメントの共同編集機能を活用したことで、個人の思考が瞬時に共有され、より広く深い議論が生まれた。これは従来のアナログ的な学習スタイルを一変させるものであり、ICTの活用がパフォーマンス課題の学びを効果的に発展させたと考える。

### 4 今後の課題

今回作成したお弁当を、ある大学のお弁当コンテストに出品して、入賞した生徒もいた。学びの成果がこのような形で評価されたことで生徒自身の大きな自信につながった。家庭科の学びを学校の中だけで終わらせるのではなく、学校外の機関（企業、政府、NPO等）と関わる形で授業を展開することが今後の課題であると考えている。実際にこれまで取り組んだ学校外との連携授業をあげると以下のものがある。

- ・夏季課題として各種料理コンテストに挑戦
- ・消費者庁主催の「めざせ！食品ロス・ゼロ」川柳コンテストに応募
- ・SNS参加型の社会貢献：NPO法人テーブルフオーツ主催の「おにぎりアクション」参加（写真1）
- ・経済生活「家計資産の形成」の単元で社会人講師による株式投資のシミュレーション授業の実施（写真2）

このような授業実践の中で自分たちの学びが、社会とつながっているという実感を持たせることは、家庭科を学ぶ意義にも繋がり、生徒たちの真摯に学ぶ態度や表情にも表れている。

また、2単位という少ない授業時数の中ですべての単元を網羅するために「子どもの生活と保育」と「高齢者の生活と福祉」をジグソー学習にし、「衣生活と健康」と「消費行動と意思決定」の単元をまたぐパフォーマンス課題にも取り組んでいる。今後は批判的思考力を養う観点も教材に取り入れて、生徒たちが主体的に学び続けることができる家庭科教育を提案していきたい。



写真1  
おにぎりアクション生徒作品



写真2  
社会人講師による授業風景

<学校や地域でのつながり>

**農業・商業・家庭がコラボした陵南カフェの実施**

学校名	倉敷市立真備陵南高等学校	所在地	〒 710-1301 岡山県倉敷市真備町箭田 1769 番地 1
校長名	細川 欣洋		T E L : 086-698-1171 https://www.kurashiki-oky.ed.jp/mabi-ryonan-h/

**〈学校概要〉** 本校は倉敷市真備町にある定時制普通科高校である。普通科高校でありながら、2年次から農業・商業・家庭のコースに分かれて専門的な学習活動にも取り組む、特色ある教育を実践している。平成30年には西日本豪雨災害で被災して校舎1階部分が水没したが、6年が経過した現在は被災前の日常を取り戻しつつある。地域からは温かく支えられており、本校主催のボランティア活動や行事等に地域の方々が多く参加してくださったり、地元企業がインターンシップの受け入れを積極的に行ってくださったりしている。

**実 践 の 紹 介**

実施科目又は関連科 課題研究（2単位）	実施学年 3学年	担当教員名	森岡 優衣
------------------------	-------------	-------	-------

**1 実践のねらい**

本校のフードデザインの授業では、日常食の調理を基に和洋中などのテーマに沿ったレシピの考案・調理を行う中で、食材の特徴を活かした基本的な調理技術の習得を目指している。また、学習活動を通して、食に興味を持ち、自分や家族の健康を生涯にわたって考え増進する力の育成をねらいとして実践に取り組んできた。

本校では農業・商業・家庭の教科の枠を超えた連携について検討してきたが、これまで具体的な実践には至っていなかった。そのような中、2024年度から新たに課題研究が3年次に開講されることになったのを機に、3教科連携プロジェクト「陵南カフェ」が発足した。この課題研究では、今まで培った知識・技能を活用した体験的・実践的な学びや協働的・主体的な学びを通して、課題発見・課題解決能力の育成をねらいとして実践した。

**2 実践内容**

教科の枠を超えた連携として、農業選択者が栽培・収穫した野菜を家庭選択者が調理・加工し、商業選択者が宣伝・サービスを行う一連の流れを設定した。食品衛生の観点から、倉敷市保健所に依頼し、カフェ実施に向けて手洗いの方法や食中毒防止に関して講義をしていただいた。安全性の観点から、当日調理したもののみ販売が可能であり、本校の教職員・生徒を対象に前売り券を販売し提供数の管理を行った。実践日を4月からの取組がまとめに向かう11月と12月に設定し、それぞれ準備を行った。家庭科では、旬の食材について調べ学習を行い、レシピの考案や試作、試作後は原価計算やポップ・チケットの作成など本番に向けて少しずつ準備を行った。以下に実践した内容を記載する。

**(1) アップルパイとドリンクの提供（11月に実施）**

秋からが旬となるりんごを使ったアップルパイ（写真1）とドリンクを提供した。ドリンクにはフルーツジュースとサイダー、アイスを組み合わせたオリジナルドリンクとコーヒー等を提供した。2時間連続授業のうちの5限に調理を行い、提供に合わせてオープンに入れるタイミングを設定し6限にカフェをオープンした。



写真1

## (2) ランチ提供 (12月に実施)

日頃、お世話になっている先生方に向けて1食 500円の感謝ランチを限定20食で提供した。メニューは、ご飯・煮込みハンバーグ・白菜のゆかり和え・みそ汁・米粉のスノーボールクッキーを作成した(写真2)。お米は9月28日に行われた、倉敷市主催の米粉甲子園にて入賞した際の副賞である倉敷産のお米を使用し、その際に作成した米粉クッキーをメニューに入れ、学びの還元に力を入れた。これらのメニューを通して、肉の扱い方や野菜の調理法といった学んだことを生かせるように、またハンバーグでは、中まで火が通らない可能性があるため、煮込みハンバーグとし必ず火が通るよう工夫した。



写真2

朝から食材の検収・下処理を行い、昼の提供に向けて調理をした。調理の際に手袋の着用や中心温度の測定、検食の実施など安全な食に向けて管理を徹底した。調理をしている間に、ランチの会場の装飾(写真3)、野菜の販売(写真4)といった準備を農業選択者と商業選択者にしてもらった。注文が入ると、それぞれ料理を完成させランチの提供(写真5)を行った。



写真3



写真4



写真5

## 3 成果

今回の陵南カフェでは、本校教職員に協力や助言をいただき成功することができた。教科の枠を超えた連携については、試行錯誤して取り組むことができた。陵南カフェを通して、生徒たちが協力する大切さ、達成感を味わうことができたと感じている。自分で作ったものを食べてもらうという経験は本校の生徒たちにとって有意義なものとなった。メニューの中には、米粉甲子園で実施したレシピを取り入れ、農業選択者が作った野菜(白菜、ほうれん草)を入れる等の工夫をすることができた。多くの先生方や生徒から高評価を得られたので、来年度も継続に向けて動き始めている。生徒の気づきを以下に示す。

[生徒の回答(抜粋)] ~陵南カフェでの学び・気が付いたこと~

- ・改めて、料理を作る楽しさと自分たちが作ったものを食べてもらい喜んでもらえる嬉しさに気が付くことができた。
- ・原価計算では、販売利益や適切な値段設定について考えることができた。
- ・役割を分担して効率よく動けるよう協力し合えることができた。

## 4 今後の課題

今後、陵南カフェを継続的に実施にするため、新たなメニューの検討や各選択コースでの役割分担の見直しが必要になるだろう。引き続き、農業・商業・家庭の教員を中心に協議しながら生徒の現状に合ったものへと変化させていくつもりである。来年度は、4月からカフェの実施を見越した果物・野菜の栽培、商品開発など年間の見通しを持って行動していきたい。さらに、今後は地域の食材や食文化の伝統・継承など地域に根差した調理の実践へと発展させていきたいと考えている。これからも多くの方々から支えられて活動が出来ていることに感謝して、教科の枠を超えた連携、地域との連携を深め、よりよい学びとなるよう取組を続けていく。

<幸福感（現在の自分と将来・自分と周りの他者）>

## 職業調べによるライフプランの設計～大人へのインタビュー～

学校名	福岡県立北筑高等学校	所在地	〒 807-0857 福岡県北九州市八幡西区北筑一丁目1番1号 T E L : 093-603-6221 https://hokuchiku.fku.ed.jp
校長名	板木 俊二		

〈学校概要〉 普通科と英語科の2学科が設置されており、昭和53年の開校以来「現代に生きる逞しい人間の育成」を学校教育目標として掲げ、学校生活の様々な場面において、生徒と教師との信頼関係に基づく最後まで諦めさせない粘り強い指導を行っている。時代の変化を前向きに受け止め、自分や社会の在り方を見つめながら、様々な課題解決に挑戦し、未来の作り手として、逞しく生き抜くことができる有為な人材の育成を目指している。

### 実 践 の 紹 介

実施科目又は関連科目名（単位数）	実施学年	担当教員名
家庭基礎（2単位）	1学年 2学年	柴田 由美子

#### 1 実践のねらい

大人への職業インタビューを通して将来を見据えて物事を考え、現在の自分を見つめ直し、将来の生き方、働き方をイメージできるようにする。また、調べるだけでなく、グループ内で発表することにより、様々な職業があることで社会が成り立っていることを知るきっかけづくりを行った。

#### 2 実践内容

##### （1）事前課題（ゴールデンウィーク期間）

- ①授業を通して今現在のライフプランを考える。
- ②Google Classroomに、職業インタビュー（図1）と題したドキュメントを配信し、身近な大人から仕事の内容や大変さ、やりがいなどをインタビューする。

##### （2）課題の発表

- ①働く理由を考えさせる  
インタビューの発表をする前に、班で「なぜ人は働くのか？」を討議させる。班でまとめた結果を発表し、各班の考えを共有する。
- ②班でインタビューした内容を発表する  
Google Classroomにまとめるためのドキュメント（図2）を配信し、聞いた内容などを入力できるようにし、最後に考えたことなどを記入する。

##### （3）職業インタビューをした生徒の感想（職種）

- ・やりがいを見つけやすいが、ストレスが多い職業だと思った。また、人とコミュニケーションをとることがこの職業では最も必要になってくると思ったので、今のうちから自分だけでなく周りのことも考えて行動していくことが大切だと思った。（事務）
- ・大人ならではの視点からの話や自分の趣味を仕事にしていることなどを聞き、自分ももしかしたら今は趣味であることが将来の自分の仕事になることもあるのではないかと感じました。高校生へのメッセージでも書いてあるように自分も様々なことに挑戦して、視野を広げていきたいと思いました。（土木業）

- ・今まで父の仕事は理解しているつもりだったけど、実際に仕事内容や大変なことを聞いてみると、改めてとても大変で重要な仕事だということがわかりました。でも仕事に対してとてもやりがいを感じていると聞き、私も将来やりがいを感じることができたり、人の役に立てたりできるような職業につきたいと感じました。これから自分の職業を決めていくうえで参考にしていきたいです。（海上保安官）

**職業インタビュー**

インタビューする人の職業(職種)	看護師 緊急センター 集中治療室	職業年齢	23年目
仕事に就くにあたって必要なことがあったら教えてください	人の命を救うことができるかどうか 人を助けたいという気持ちがあるかどうか		
仕事の内容	集中治療室における患者と家族の精神的・身体的ケア 救急患者の状況観察、評価、必要な処置 DMMAT(災害医療)として災害発生時にける活動 災害支援看護師として災害現場における支援活動		
現在の仕事を選んだ理由	クリニックで事務として働いたが、看護師の活躍を見て、看護師を選んだ。		
仕事の難しさや楽しさにはどのようなことがあったか	突然の病気で戸惑う患者と家族の心情的ケアに対応すること 人の命を預かるという責任の重大さ 家族からのスタッフ層での患者の病情共有 業務や患者の関連しないこと 患者の対応やその対応能力が求められる心理的ストレス		
難しさや楽しさなどのように乗り越えたか	同様、先輩、先輩に相談をする 休日はフレッシュする 子供に恵われてもらう		
仕事のやりがいや楽しさ	患者が回復して退院したとき 看護をして患者の笑顔が見れたとき 自分の役割が活かされたとき		
高校生へ一言	看護師は資格を取ってでも赤字は進歩しているので一歩勉強が必要！でも楽しいよ。		
話を聞いて感じたこと	仕事終わりで目が死んでいる暇の言葉はより感じさせるものがありました。		

図1 職業インタビュー

**職業労働について**

- なぜ人は働くのか???

お金を稼ぐため、社会の役に立つため。

- 「1」について更に話し合ってみよう!! (発表あり)

生活するため、自分の仕組みを知って慣れるため。  
家族を養うため、自分を成長させるため。  
習うが、生きかえを受ける。安心して暮らす。  
勤務の義務があるから。

- 友人の職業インタビューを聞こう。

氏名	仕事内容等	思ったこと
さん	製造業、28年目。必要な事なし。セラミックの加工。興味があったから、加工する時に寸法の誤差が0.005以内に取りたいといけなくて、神経を使うことが難しい。自分で挑戦して行く姿勢を大切に。社会の役に立っているやりがい。	日々の生活を変えてくれている製造業の素晴らしさを知った。加工の誤差など、細かい作業を要することが分かった。 失敗を恐れず挑戦し続けていきたい。
さん	介護士、4年目。介護の免許が必要。お年寄りとお年寄りとの介護。介護人でも働けるから。言葉の壁が難しい。日本語の勉強をして乗り越えた。人を手伝うことが出来て嬉しい。	介護士の他にもケアなども必要で大変な仕事だと思ったり。それを乗り越えているのか凄いと感心した。
さん	看護師、10年目。看護師国家試験に合格して看護師資格を取ることが必要。患者さんの診察や治療の補助を行う。血圧や体温、脈拍の測定、食事管理など。人の役に立ちたいと思ったから。労働時間が長く自分の時間が取れない。毎日学ぶことが多く勉強量が多い。仕事の中で目標を常に掲げる。患者さんの変化に気づける。色々な人と関わるため自分が成長できる。	命を守るお仕事はかっこいいと思う。忙しいだろうが、人の役に立ちたいという思いで頑張っているところも凄いと思う。
さん	会社員、9年目。資格は無いが、パソコンの技術が大切。事務仕事や書類の整理が必要。生活するため、慣れるまでは難しい。同じことを繰り返して慣れる。1ヶ月で仕事を終わらせた安心。	今の社会はパソコンの技術が必要不可欠になっていることが分かった。どんな仕事も慣れるまで難しいと思うので、慣れることが大切だと思える。

- 自分の発表を含め考えたことなどを記入しよう。

どんな仕事も辛いこと、楽しいことがあるけれど、それぞれのやりがいや目標を持って頑張ることで自分が頑張っているんだと実感した。  
将来大人になってどんな仕事に就くかは想像していないが、どんな仕事でも、やりがいや目標を持って頑張りたい。

図2 インタビュー発表会

#### (4) 発表会後の感想 (抜粋)

- ・それぞれに辛いことはあるが、どこかでその仕事を楽しむ気持ちや、仕事を続けていく力になるのだなと思った。また、仕事にやりがいを感じるものにしていくのも大切だと思った。人生のうち仕事の割合は多くを占めるという言葉が心に残った。
- ・どの仕事も人から感謝の言葉や喜んでくれる顔を見ることに、やりがいを感じ、辛いことも乗り越えられる原動力になっていると思った。また、多くの仕事が人との関わりを持っているため、高校生のうちからコミュニケーション能力を磨いていくことは、今だけでなく将来の自分にも役立つと感じた。そのため、人との関わりを面倒くさがらず、前向きに取り組んでいく姿勢を目指していきたい。

### 3 成果

ライフ・キャリアを考えていくうえで、様々な職業があることを知ることは重要であると考えます。生徒の大半は保護者に職業インタビューを行う。部活動や勉強で日ごろ保護者と話す機会が少なくなっている生徒にとっても、課題をきっかけに会話をするというきっかけづくりになって欲しいとの思いもあり、課題を設定している。保護者へインタビューをしたことで働くことの大変さを知り、保護者への感謝の気持ちを述べる生徒もいる。また、発表会を通して、自分の知らない職業を知ることができ、将来の選択の幅が広がり自分の考えを見つめ直すことができたようである。

### 4 今後の課題

今回はライフ・キャリアを考えるうえで職業インタビューを行った。職業だけでなく、子供のころの話や高齢者へのインタビューなど色々な形で他者と話す機会を増やして自分を見つめ直すようにしたい。班の中での発表にすると、数種類の職業の話しか聞くことができない。Google Classroomを使用した課題であったので、今後は、クラス全員に調べたことを共有できるような工夫をしていきたい。

## <教 員>

<自己肯定感>

### 多様な社会を生きるために

学校名	熊本市立千原台高等学校	所在地	〒 860-0073 熊本県熊本市西区島崎 2 丁目 37 番地 1 号 T E L : 096-355-7261 https : //www.kumamoto-kmm.ed.jp/sch/h/chiharadai
校長名	南 弘一		

〈学校概要〉 本校は、熊本城の近くに位置し、熊本市立商業高校から平成 12 年 4 月に現在の校名となり普通科と情報科を設置する高校となり、令和 5 年 4 月から健康スポーツ探究科と情報ビジネス探究科に学科改編された。各種検定試験合格や企業との PBL 学習だけでなく、複数の部活動で全国大会へ出場するなど文武両道で活躍する生徒が多い。『一生懸命はカッコイイ』の教育目標のもと、先の見えない社会で合意形成と協働を行える「人間力」を育成するべく特色のある教育課程を展開している。

### 実践の紹介

実施科目又は関連科目名（単位数）	実施学年	担当教員名	
家庭基礎（2 単位）	2 学年	片山 七海	

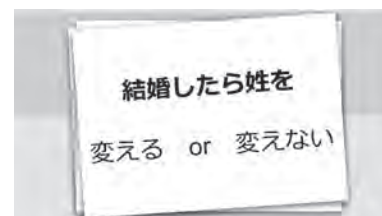
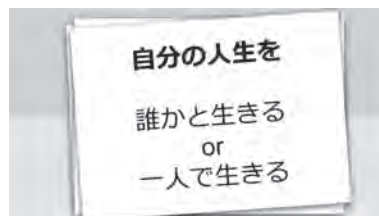
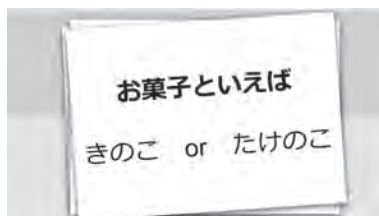
#### 1 実践のねらい

得た知識や自身の経験をもとに思考したり判断したりする能力は今後、非常に重要になると考えられる。生徒同士での意見交換や地域との交流を通し、自己や家庭、地域を愛し協働する能力を育むとともに、相手の意見を尊重しつつ自分の考えを素直に表現できるようにすることをねらいとしている。

#### 2 実践内容

##### (1) 二者択一ゲーム

家庭基礎の一番初めに授業で行う内容である。クラス替えをしたばかりの学級でお互いを知る機会としてのねらいもあり、ペア同士でお互いに 1 つの質問に答えその理由を伝え合う。初めは簡単な質問であるが、次第に個人の価値観やライフプランに関わる内容を提示し、思考力を深めるほか相手の意見も尊重すること、家庭科では答えが 1 つとは限らない場面があることに気付けるようにする。



##### (2) 赤ちゃん交流会

熊本市の保健師や助産師、地域の民生委員、地域の子育てサークルに登録している親子（新生児～幼児）を本校へ招き、1 クラスずつ交流会を行っている。生徒は 6 グループに分かれ、親子との交流 2 回（親子 2 組）とおむつ替え・妊婦体験を 1 回、クラス全員が行う。生徒は事前に親子への質問を考え、名前の由来や出産や子育てで大変なこと、日々の生活で嬉しいことなどを尋ねていた。保健師からは飲酒や喫煙が発育に与える影響や、虐待が起こってしまった際に頼れる機関が多くあることの周知が行われ、地域の民生委員にその実例として参加していただいている。

実施後の生徒の感想文では「自分の名前の由来も知りたくなかった」「今は身体が大きいけれど、最初はみんなこんなに小さかったと分かった。ここまで健康に育ててくれた親に感謝したい」「産まれてからの方がずっと大変だと分かった。性別に関係なく自分にできることをしたい」等と綴られ、交流会を通し自分が家族に大切にされてきた過程に気付く様子があった。十数年前にこの学習を行った本校の卒業生が保護者として参加するなど、学校での学びが地域を包括し循環する様子もみられ、非常に有意義な体験となっている。



### (3) 郷土料理講習会

熊本市の栄養士、地域の食生活改善推進委員に来校いただき、熊本の郷土料理である「だご汁」と「いきなりだんご」の調理実習を行っている。高齢者を含めた異年齢の地域の方と調理を通して、食育、郷土愛の育成、高齢者との交流等から食事を図っている。



### (4) 自由調理実習

生徒が自分で献立作成、食材の購入、単独での調理を行う実習を実施している。栄養バランスへの配慮、調理技能と調理の時間を考慮した調理法の選択、食材価格の実態などを知る良い機会となっている。



## 3 成果

生徒の年度末の感想によれば、家庭科での体験によりライフプラン形成を考えることができた。異年齢の方と交流することで、社会人となる前に様々な知識や技能を身に付けられた等、学習への意義を感じていることが分かった。また今日までの17年間の子育てや毎日の食事の準備、地域での協力があり今の自分が生活できているというこれまで見えなかった周囲の支援に気付き、「自分が大切にされている」という意識を持つことにつながったと綴る生徒も多数見受けられた。

## 4 今後の課題

活動を通しての気付きや考えの変容を、より将来設計に生かせるような学習時間の確保が必要であると考え。 「体験して終わり」ではなく「では自分はどうするのか」と生徒の振り返りを行える機会を設けるために、今後は3年次の総合的な探究の時間などと教科等横断的な学習を展開していきたい。

令和6・7年度

## 家庭科教育とウェルビーイング

全国高等学校長協会家庭部会  
普通教育に関する調査研究委員会

発行日 令和8年3月31日  
所在地 〒102-0071 東京都千代田区富士見1-5-6  
電話 03-3261-0617  
FAX 03-3288-1670  
URL <https://www.katei-ed.or.jp/>  
E-mail [all-kocho@katei-ed.or.jp](mailto:all-kocho@katei-ed.or.jp)